

比 恵 55^{HI E}

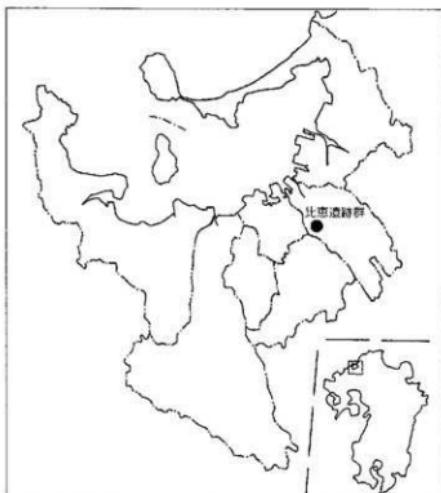
—比恵遺跡群第112次調査報告—

2009

福岡市教育委員会

HI E
比 恵 55

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1049集



調査番号 0745
調査略号 HIE-112

2009

福岡市教育委員会

序

現在、九州の中枢都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は、増加の一途をたどっています。

そして、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、本市博多区博多駅南6丁目において発掘調査を実施した比恵遺跡群第112次調査の記録を収録したものであります。

調査の結果、弥生時代と古墳時代・古代の集落が確認され、長きにわたって本地域が発展し続けた事を示す良好な資料を得ることができました。

調査に際し快くご理解とご協力をいただきました地権者である中村政男様には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係者各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は中村政男氏が実施した博多区博多駅南6丁目85-12地内において民間開発にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課が平成19年度に実施した比恵遺跡群第112次調査の調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告書作成は共同住宅建設に伴う受託事業として行った。ただし、福岡市が定めた内規により、個人事業の際の125m分については国庫補助金適用とした。
3. 本書で用いる方位は旧国土座標第2系による座標北で、磁北はこれに6° 10' 西偏する。
4. 調査区は予定建物を基軸として任意の5m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は西交点とした。
5. 遺構の呼称は略号化し、不定形土壙→SX・井戸→SE・土壙→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。
6. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦による。
7. 本書に使用した遺物実測図は加藤・井上加代子・米倉法子による。
8. 製図は井上加代子・副田則子・撫養久美子による。
9. 本書に用いた写真は加藤による。
10. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
11. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II.	調査区の立地と環境	2
III.	調査の記録	7
1.	調査の概要	7
2.	弥生時代の調査	9
3.	古墳時代の調査	19
4.	古代の調査	36
5.	混入資料	41
IV.	小結	44

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig. 2	調査区位置図 (1/4,000)	4
Fig. 3	調査区周辺測量図 (1/500)	5
Fig. 4	遺構全体図 (1/200)・東西壁土層断面図 (1/100)	6
Fig. 5	SX11・12 (1/80) 土層断面実測図 (1/60)	9
Fig. 6	SX11・12出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig. 7	SK06・D3SP1・2 (1/40)・SX10・17・19 (1/80)・土層断面実測図 (1/60)	13
Fig. 8	SK06・SX10出土遺物実測図 (1/3)	14
Fig. 9	SX17出土遺物実測図1 (1/3)	15
Fig. 10	SX17出土遺物実測図2 (1/3)	16
Fig. 11	SX19・SP出土遺物実測図 (1/3)	17
Fig. 12	SD02土層断面 (1/60)・SK16 (1/40)・SX05実測図 (1/80)	20
Fig. 13	SD02・1~3層出土遺物実測図 (1/3)	23
Fig. 14	SD02・4~8層出土遺物実測図 (1/3・2/3)	25
Fig. 15	SD02・SK16・SX05出土遺物実測図 (1/3)	27
Fig. 16	SD04土層断面 (1/60)・SK08・24・SE25 (1/40)・SX18・26実測図 (1/80)	30
Fig. 17	SD04出土遺物実測図 (1/3)	32
Fig. 18	SK08・24・SE25・SX18・26出土遺物実測図 (1/3)	34
Fig. 19	SE03・09・13 (1/60)・SX01・07・14・21 (1/80) 実測図	37

Fig.20	SE03・09・13・SX01・07・14・21 出土遺物実測図 (1/3)	39
Fig.21	混入遺物実測図.1 (1/3・139.140=2/3)	41
Fig.22	混入遺物実測図.2 (1/3)	42
Fig.23	混入遺物実測図.3 (1/3)	43
Fig.24	周辺溝分布図 (1/4,000)	45
Fig.25	関連半島系土器 (1/3)	45

写 真 目 次

Ph.1	調査前風景 (南から)	7	Ph.27	SD02遺物出土状況 (北から)	24
Ph.2	西半部遺構全景 (南から)	8	Ph.28	SD02遺物出土状況 (北から)	24
Ph.3	東半部遺構全景 (南から)	8	Ph.29	SK16 (南東から)	24
Ph.4	遺構検出面 (西から)	9	Ph.30	SD02出土遺物.1	26
Ph.5	SX11 (南から)	11	Ph.31	SD02出土遺物.2	28
Ph.6	SX11遺物出土状況 (東から)	11	Ph.32	SD04西壁土層断面 (東から)	29
Ph.7	SX11土層断面 (西から)	11	Ph.33	SD04東壁土層断面 (西から)	29
Ph.8	SX12 (北から)	11	Ph.34	SD04東半部 (西から)	29
Ph.9	SK06 (東から)	12	Ph.35	SD04底面足跡 (東から)	31
Ph.10	SX10 (南から)	12	Ph.36	SD04底面足跡 (東から)	31
Ph.11	SX10遺物出土状況 (南から)	12	Ph.37	SD04底面足跡 (南から)	31
Ph.12	SX10横木出土状況 (北から)	12	Ph.38	C2グリッド足跡 (東から)	31
Ph.13	SX17 (西から)	12	Ph.39	SK08土層断面 (西から)	33
Ph.14	SX17遺物出土状況 (西から)	14	Ph.40	SK08 (西から)	33
Ph.15	SX17遺物出土状況 (東から)	14	Ph.41	SK24・SE25 (東から)	33
Ph.16	SX19 (南から)	14	Ph.42	SX18遺物出土状況 (東から)	33
Ph.17	SX19遺物出土状況 (西から)	14	Ph.43	SX18 (西から)	33
Ph.18	D3・SP2 (西から)	16	Ph.44	SX26 (西から)	35
Ph.19	弥生時代出土遺物.1	18	Ph.45	古墳時代出土遺物	35
Ph.20	弥生時代出土遺物.2	19	Ph.46	SE03土層断面 (南東から)	36
Ph.21	SD02西壁土層断面 (東から)	20	Ph.47	SE03 (南東から)	36
Ph.22	SD02西半部 (西から)	21	Ph.48	SE09土層断面 (東から)	38
Ph.23	SD02東半部 (西から)	21	Ph.49	SE09 (南から)	38
Ph.24	SD02銅鏡出土状況 (東から)	22	Ph.50	SE13 (西から)	40
Ph.25	SD02板出土状況 (南から)	22	Ph.51	奈良時代出土遺物	40
Ph.26	SD02遺物出土状況 (北から)	22	Ph.52	混入資料	43

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市博多区博多駅南6丁目85-1・85-2において、中村政男氏より共同住宅建設計画に策定に当たって埋蔵文化財の有無の照会のため、平成19年6月11日に事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された事により始まる。申請面積は771.43m²、受付番号は19-2-212である。

埋蔵文化財課で確認した所、申請地が比恵遺跡群の範囲内であり、内容など状況を把握するため同年7月31日確認調査を実施し、その結果古墳時代～古代の溝を検出した。

同課では設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断した。そのため遺跡の破壊を伴う建物部分に限定して事前の発掘調査を実施する事となり、調査に関して同氏と教育委員会との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成19年10月15日に着手、同年11月30日に全ての行程を終了した。

調査番号	0745	遺跡略号	HIE-112
調査地地籍	博多区博多駅南6丁目85-1・85-2	分布地図番号	37(東光寺) 0127
開発面積	771.43m ²	調査実施面積	354.3m ²
調査期間	071015～071130	事前審査番号	19-2-212

2. 調査の組織

【調査委託】 中村政男

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣

【調査総括】 文化財部長 矢野三津夫 埋蔵文化財第1課長 山口譲治

調査係長 米倉秀紀

【調査庶務】 文化財整備課 鈴木由喜（当時）

【発掘調査】 加藤良彦

【発掘作業】 永田豊彦 原田浩 藤村正勝 山中征生 浦伸英 中村尚美 今村由利

北野宏行 近藤英彦 嶋山幸義 濱口長治 米良恵美 元澤慶寛

結城敦雄

【整理作業】 木村厚子 国武真理子 南里三佳

II. 調査区の立地と環境

本調査区（1）は福岡市の都心部より東へ2.8km、海岸線より南へ1.5kmの地点の、福岡平野の中央部を流れる那珂川と御笠川に挟まれた北側の洪積台地上に位置する。

本調査区が立地する比恵・那珂遺跡群は、春日丘陵から断続的に長く延びる阿蘇山の火碎流堆積物による八女粘土層・鳥栖ローム層に覆われた洪積台地上に立地し、須玖遺跡群から井尻B遺跡・五十川遺跡・本遺跡群へと連なり、殊に弥生時代から古代にかけて中枢域を示す重要な遺跡が分布する（Fig.1）。

本遺跡群は標高5～10m 南北2.5東西1.0km程の範囲に広がり、台地縁辺部は那珂川・御笠川の開析作用により樹枝状の複雑な地形を成している。台地中央の東西方向の鞍部を挟んで便宜的に北部を比恵遺跡群・南部を那珂遺跡群と呼称しており、本調査区はこの鞍部の奥部北側、1938年故鏡山猛九州大学名譽教授による第1次調査である県指定史跡比恵環溝集落の南に位置する（Fig.2）。地表面標高は6.8mを測る。古代・古墳時代後期の包含層下の八女粘土上が検出面となり、標高は5.4mを測り、南東に緩傾斜する。周辺では第9・10・61・82・88次調査などが実施されているが（Fig.3）、昭和初期の区画整理での削平が深く、弥生時代中期から古墳時代初頭の豪族居館の環溝・井戸など、深い遺構しか遺存しない。

遺跡群の歴史環境を概観してみると、後期旧石器時代ナイフ型石器・彫器が削平の浅い台地縁辺の比恵19次・那珂38・41次調査で検出され、散漫な分布を示す。縄文時代も同様で比恵30次調査で前期の深鉢が検出されるのみである。遺構の初現は突帯文期からで、台地縁辺の低位部に展開し那珂37次調査では二重環溝が掘削される。弥生前期は比恵では北西部を中心に、低位部に貯蔵穴・木器貯蔵穴・水溜構造等が、前期末以降中期には集落が縁辺部から高位部に拡大し堅穴住居・貯蔵穴等が各所に広がる。また、集落周辺には甕棺墓群の形成も始まり、比恵6次調査では細型銅剣を副葬する中期初頭～前半の墳丘墓が、那珂21次調査等でも中期中頃～後半の墳丘墓が検出されている。比恵東側沖積地の1次調査では中期中頃～後期前半の水田が検出。中期中頃以降は中央部に集住が始まり井戸・掘立柱建物が出現する。中期後半から後期に集落は爆発的に増加し、中期末～古墳時代前期前半をピークに遺跡範囲は100haを越え島最大級の遺跡となる。青銅器・ガラス工房関係の複数地点での出土・多数の直線的大溝・方形の区画溝の掘削・井戸の大量掘削・銅鏡・銅製鋤先・鉄器・水銀朱原料（辰砂）の多数出土等多くのものが高密度の拠点であることを、また広域の掘立柱建物群・半島系土器を含む広範囲にわたる外来系搬入土器の出土等交易の一大拠点であることを示している。古墳時代初頭前後には須玖岡本遺跡が衰退するなか、交替に遺構が微増し、延長1.5kmにわたる並列二条溝（道路？）の掘削・方形周溝墓群と那珂中央には全長85m九州最古期の那珂八幡前方後円墳の築造と、「奴国」の中権の移動を示している。前半以降一時衰退するが、那珂で5世紀末に劍塚北前方後円墳築造以降集落が拡大し、6世紀代には堅穴住居と掘立柱建物群が數カ所に広がり、6世紀後半の3重周濠全長140mの東光寺劍塚前方後円墳築造時には集落が増大し、6世紀後半～7世紀中頃には比恵・那珂の集落から隔絶した高所に多重柵列・大型掘立柱建物群が數カ所で造営され、「那津官家」に関わる官衙的な建物群とされる。6世紀末以降官衙的な建物群は那珂に収斂され、7世紀中頃～末には正方位の溝が縱横に掘削され、瓦・硯の出土等官衙的な内容を濃くする。比恵東の79次調査では水城東門ルートの官道が検出されている。8世紀、那珂では継続して中心的な集落として維持されるが、比恵では減少する。



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

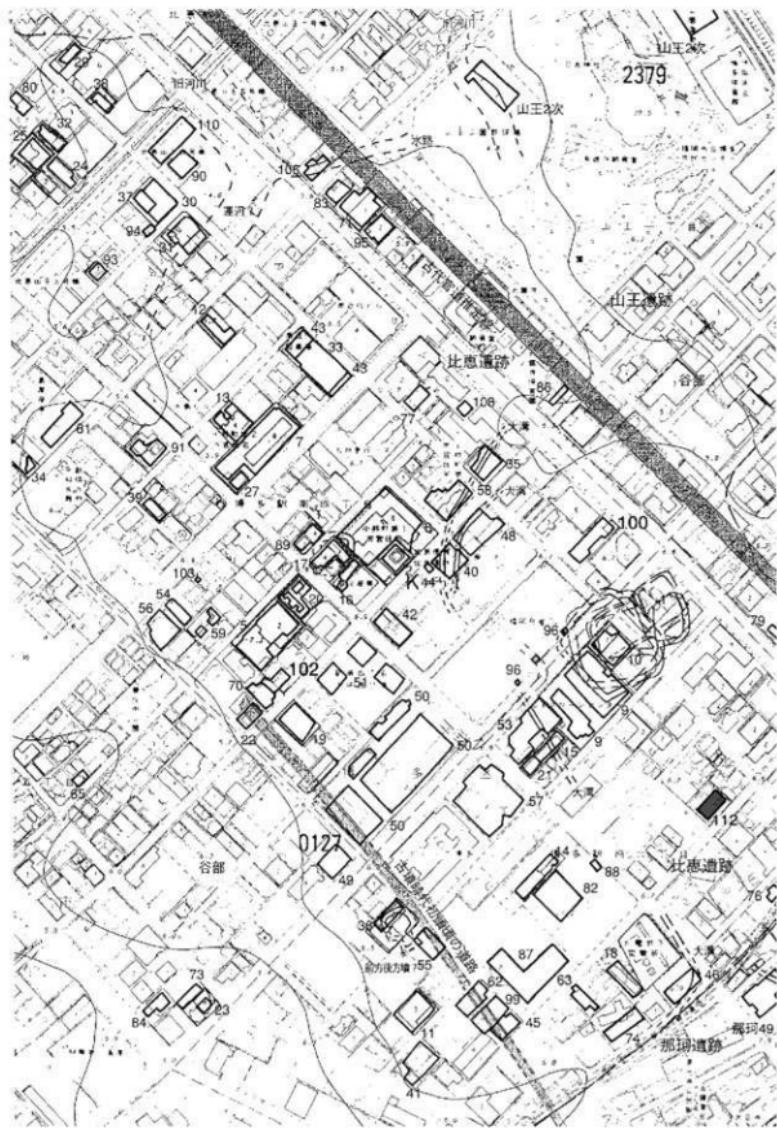


Fig. 2 調査区位置図 (1/4,000)

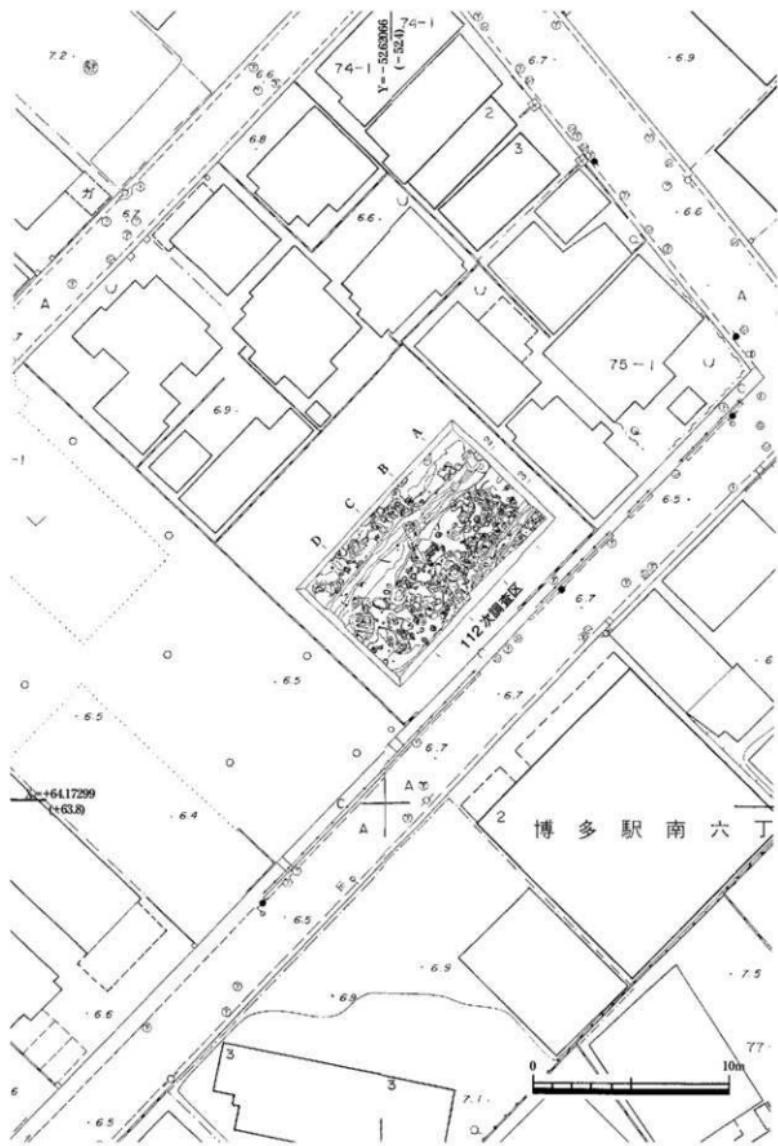


Fig. 3 調査区周辺測量図 (1/500)

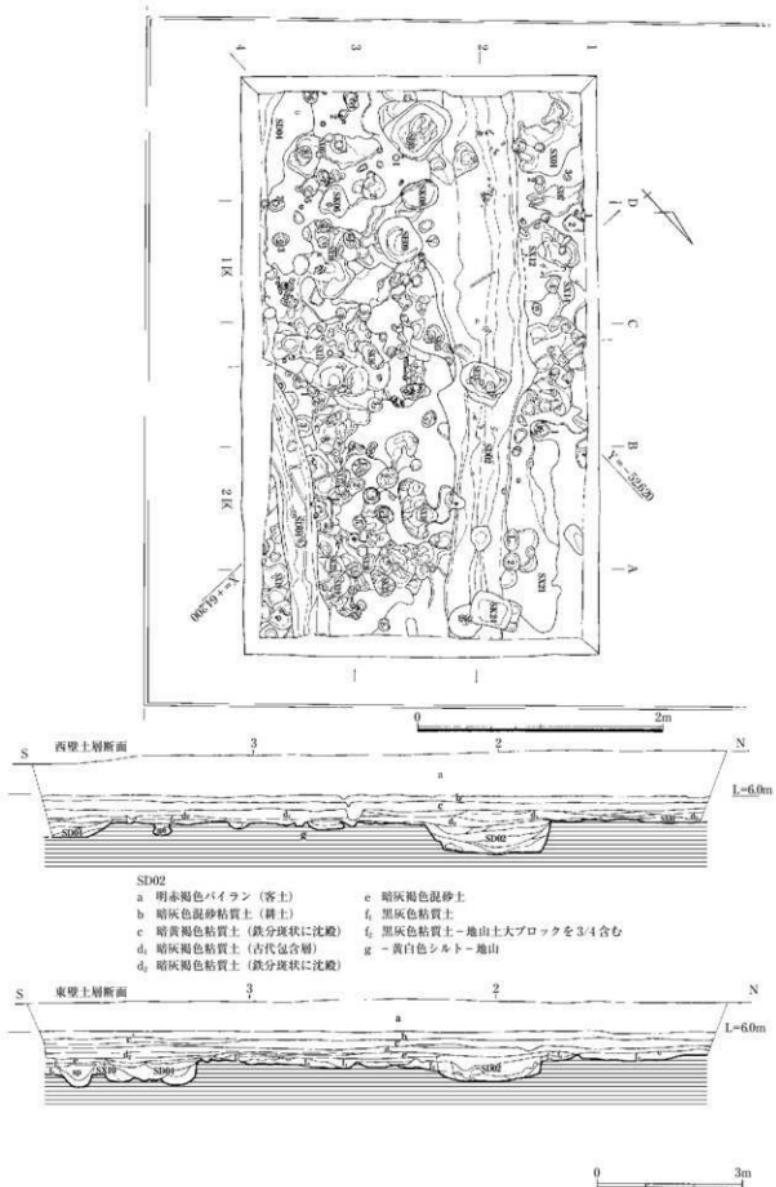


Fig. 4 遺構全体図 (1/200)・東西壁土層断面図 (1/100)

III. 調査区の記録

1. 調査の概要

本調査区は比恵・那珂両遺跡を分断する東西方向の台地鞍部の中央部北側に位置し、現地標高は6.8mである(Fig.1～3)。

層序は(Fig.4) 60～80cmの表土・花崗岩バイラン客土(a層)・下に20cm程の区画整理前の水田耕作土(b層)・15～20cm程の暗黄褐色粘質土の水田床土(c層)・15～30cm程の暗灰褐色粘質土の古代包含層(d層)が堆積し、部分的に15cm程灰褐色混砂土・黒灰色粘質土の弥生・古墳時代包含層(e・f層)が遺存し、遺構検出面の八女粘土層(g層)上面となる。地形は南東側に緩く傾斜し、包含層f層が堆積する。遺構検出はd・e層を除去した段階で実施した。

調査は遺構の破壊される建物部分に限定し、測量基準線は建物の基準線に合わせ、任意で5mグリッドを設定した。排土は場内処理となっていたため、遺構面まで150cm前後と深く多量の排土が予測され、調査範囲外での処理は不可能と判断し、調査区を東西で二分し、排土を反転して調査を実施する事とした。西半部を調査1区として10月15日より重機による表土剥ぎに着手し、翌16日より作業員を導入し遺構検出を開始した。この際、遺構面全面がおそらく牛と思われる獸類に踏み荒らされ、地山土と包含層f層が斑に混和された状態で(E2層・ph.2)、古代の遺構は明確に検出されるものの、以前の遺構は明瞭に検出されなかった。期間的に2面にわたる調査を実施する余裕もないため、上面で検出した遺構をベルトで残し、f層を数cm～10cm程掘削して遺構面を明瞭にし、遺構検出を実施した。殊にf層の残りがよい東半部・2区ではこれが顕著であった。11月7日に西半部全景を撮影、11月11日に測量・実測を完了し、11月12日より重機による排土反転を開始し東半部・2区の表土剥ぎを実施した。11月27日に東半部全景を撮影、11月28日に測量・実測を完了し、29日に重機による埋め戻し、30日に調査機材を撤収し調査を完了した。

検出したおもな遺構は弥生時代終末期不整形土壙5基・土壙2基、古墳時代初頭～前半溝1条・土壙1基・不整形土壙1基、古墳時代後期溝1条・井戸1基・土壙4基・不整形土壙2基他柱穴、奈良時代井戸3基・不整形土壙4基他柱穴で、主に4時期の集落が重複し、平安前期以降には水田化し、昭和初期の区画整理の客土により宅地化されている。

遺物は、弥生時代後期～古墳時代土器を中心、各遺構から旧石器・弥生土器・石器・銅鏡・土師器・須恵器・瓦などコンテナ28箱分検出している。



Ph.1 調査前風景(南から)



Ph. 2 西半部遺構全景（南から）



Ph. 3 東半部遺構全景（南から）

2. 弥生時代の調査

弥生時代の遺構は主に南東部に分布し、後期後半～終末期の遺物が包含層 f 層黒灰色粘質土中で多く検出されるが、前述のように、踏み荒らされ地山土と包含層 f 層が斑に混和された状態で遺構は明瞭に検出されず、地山面まで下げ検出を行っている。遺構は終末期の土壙 2 基・土取り状不整形土壙 5 基で、不整形土壙が中心となる。遺構内からは各時期の遺物が少量混在して検出されるが、上面から踏み込まれたものと考えられ、踏み込みが困難な大型の破片がまとまった遺物で時期比定を行った。



Ph. 4 遺構検出面（西から）

1). 不整形土壙

今回の調査では終末期で 5 基検出し、古墳時代の溝 SD02・04 に切られる。

SX11 (Fig.5 Ph5 ~ 7) SX11 は C2・3 グリッドに位置し、SX10 と切り合う。平面は凹凸の著しい半月形で $6.8 + a \times 3.8$ m 深さ 10 ~ 60 cm を測り、1 ~ 2 m 程の土壙が多数切り合っている。南部には 110×7 cm 程の木製棒材を床面に据え、足場とした可能性がある。同様の棒材が SX10 でも検出される。覆土の大半は黒灰色粘質土に多量の地山土ブロックを含む客土で埋め戻され、遺

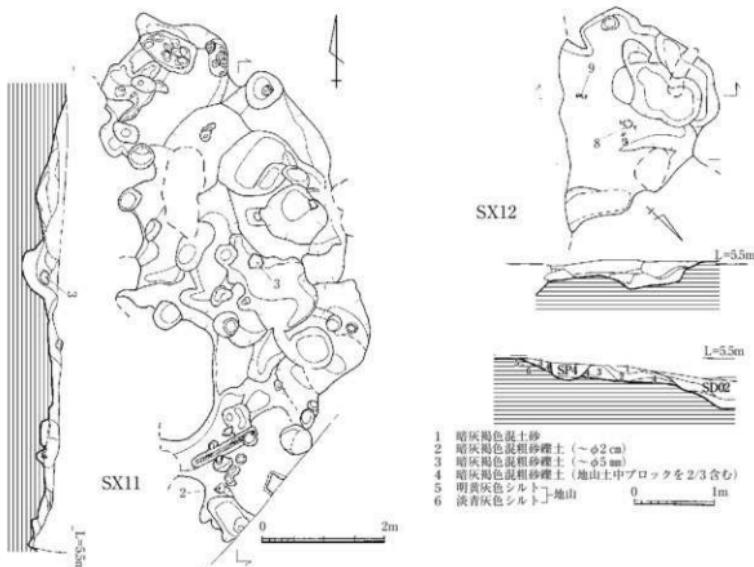


Fig.5 SX11・12 (1/80) 土層断面実測図 (1/60)

物の多くはこの上部で検出される。

出土遺物 (Fig.6 Ph.19) 1～3は壺で、1は二重口縁で口縁端部を欠く。現況で15.4 cm、口頭部内面はナデ。胎土は粗い砂礫を多く含み浅黄橙色。2は径2 cmの底部を残す五様式系壺で胴径19.8 cm。器表が剥離し調整の大半は不明。内底にハケメが残る。胎土は粗い砂礫を多く含み灰白～鈍い黄橙色。3は口縁を欠く球形壺の壺で胴径24 cm。器表が剥離し調整は不明。底部は9.6 cmのレンズ底と考えられ、後期後半。胎土は粗い砂礫を多く含み鈍い黄橙色。4は径3 cm程平底を残す壺底部で外外面に粗いタテハケ。胎土は粗い砂礫を含み明黄褐色。5は高環脚部で底径7.8 cm。屈曲部の対面に焼成前の穿孔を2箇所施す。器表が荒れ調整は不明。15 mm程の石英粒を少量含み橙色。6は小形器台の脚部で底径7.1 cm。対面に焼成前の穿孔を2箇所施す。器表は荒れ調整は不明。1 mm以下の石英粒を少量含み黄灰～黒褐色を呈す。7は脚付土器の脚部で、底径11.4 cm。対面に焼成前の穿孔を2箇所施す。器表

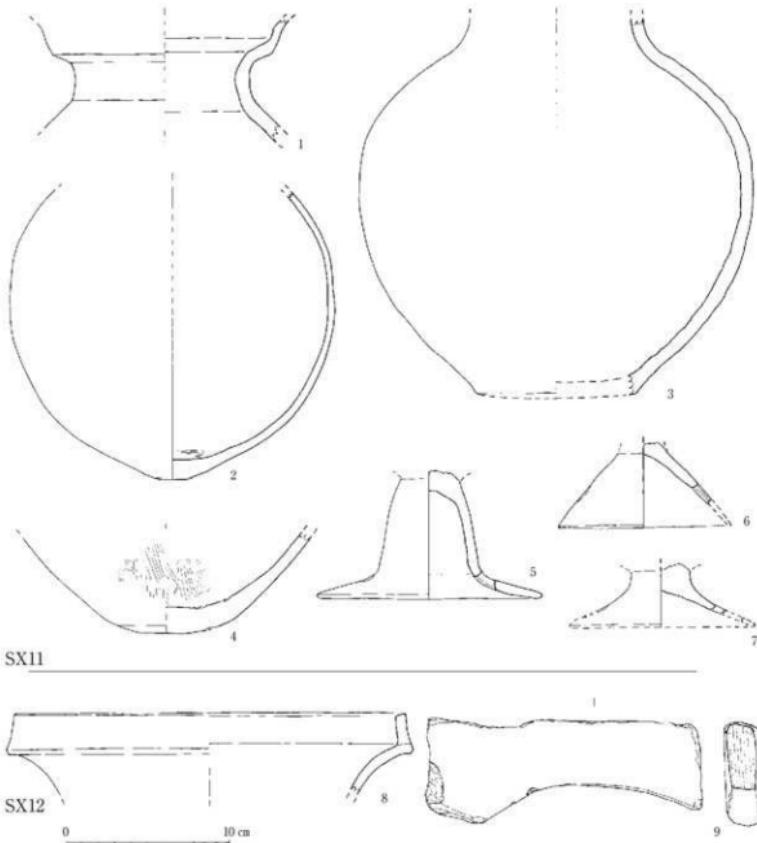


Fig.6 SX11・12出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 5 SX11 (南から)



Ph. 6 SX11遺物出土状況 (東から)



Ph. 7 SX11土層断面 (西から)

は荒れ調整は不明。内面中央に径6mm程の体部との押圧痕を残す。1.5mm以下の石英粒を少量含み浅黄橙～黒灰色。172～175(Ph.9)は円形の鍛治溝で15～25gを測る。古墳時代後期からの混入の可能性も多い。

SX12 (Fig.5 Ph.8) SXC12はD1グリッドに位置し、SD02に切られSX11の西に位置する。SX14と切り合う。不整形で3.7×2.8m深さ25～48cmを測る。内部に1.7m程の小さな土壤を持つ。覆土は暗灰褐～暗褐色混粗砂礫土でSX11とは異なり、SD02覆土の影響を受ける。

出土遺物 (Fig.6 Ph.19) 8は二重口縁壺でやや外湾し若干内傾する。口径24cm、口

唇上面が凹線状に窪む。器壁は荒れ調整は不明。胎土は粗い砂礫・赤色粒を多く含み明黄褐色。刻目突帯を施した胴部小片も出土している。9は頁岩質の細粒砂岩製の仕上砥石で、長さ16.9端部で5.8×2.3中央部で3.8×1.9cmを測る。底面・両端面を敲打で平面に整形し、両側・上面を主な砥面に使用する。節理と直交方向に使用した置砥石を使用限界で節理に沿って分割し再利用したもので、剥離面と旧底面は使用が浅い。

SX10 (Fig.7 Ph.10～12) SX10はD2・3グリッドに位置し、SX11と切り合い、古墳時代の溝SD02・土壤



Ph. 8 SX12 (北から)

SK08・古代の井戸SE09に切られる。平面は凹凸の著しい不整形で、4.2 × 3.0 m深さ12～55cmを測り、1m前後の土壌が多数切り合っている。SE09周縁の直交方向に80・170cm程の木製棒材を床面に据える。覆土も黒灰色粘質土に多量の地山土ブロックを含む土で埋め戻され、遺物は床面近くで検出される。

出土遺物 (Fig.8 Ph.10) 11は壺で口径13cm。外面はタテハケ内面は主にヨコハケを施す。長い倒卵形の胴の壺と思われる。粗い石英粒を多く含み鈍い黄橙色。12は狹小なレンズ底を有する壺で口径部を欠き、胴径17cm。頸部内面は稜を成し屈折。胴部外面は細かなタテハケ・底部脇はケズリ様の板ナデ・底面はナデ。内面胴部上位は細かなヨコハケ。中位は左上がりハケ・以下は粗い左上がりハケ底部はケズリ様のタテハケ。3mm以下の粗い石英粒を多く含み黄橙色を呈する。



Ph.9 SK06 (東から)



Ph.10 SX10 (南から)



Ph.11 SX10遺物出土状況 (南から)



Ph.12 SX10横木出土状況 (北から)



Ph.13 SX17 (西から)

SX17 (Fig.7 Ph.13) SX17はSX11の北側に位置し、これと切り合う。古墳時代のSD04・柱穴多数に切られる。平面は凸凹の著しい不整形で、 $5.1 \times 3.6 + a$ m深さ30~60cmを測り、1.5~1m弱の土壤が多数切り合っている。同じく25~60cm程の小板を2箇所床面に置く。覆土も黒灰色粘質土に多量の地山土ブロックを含む客土で埋め戻され、遺物は床面近くで多く検出される。

出土遺物 (Fig.9・10 Ph.19) 13・14は二重口縁壺。13は底部を欠くがほぼ完形で口径24.2cm・

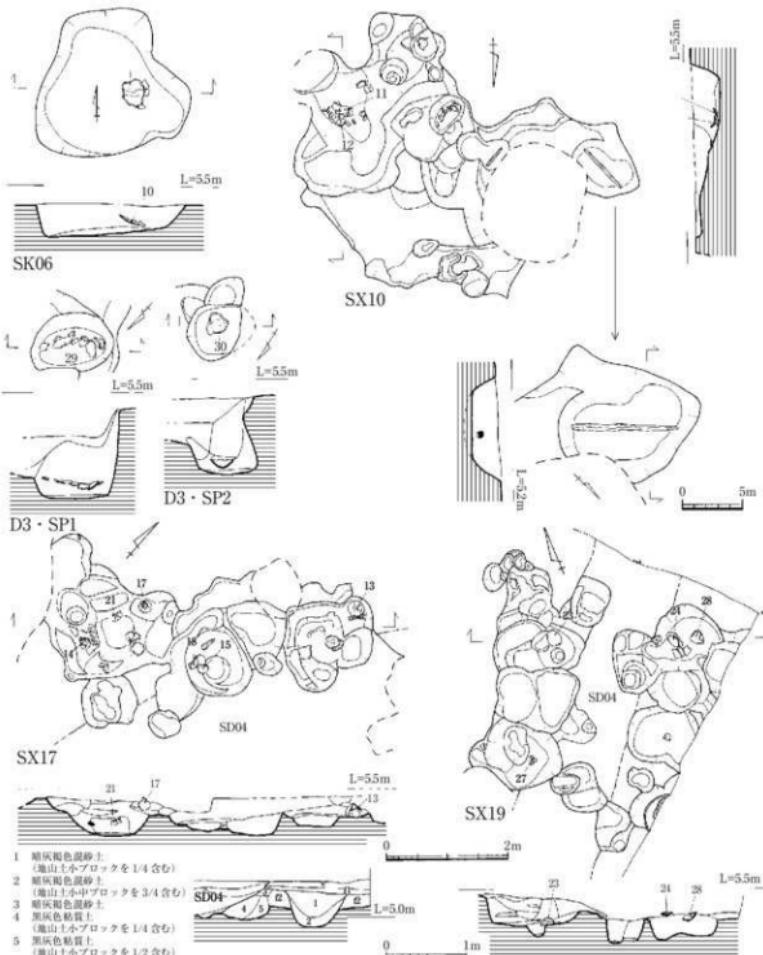


Fig.7 SK06・D3SP1・2 (1/40)・SX10・17・19 (1/80)・土層断面実測図 (1/60)

器高 30.7 cm。外面は細かなタテハケ。頸部の三角突帯に斜位の刻目を施す。内面はヨコハケ後ヨコナデ。低位にタテの指頭圧痕が残る。粗い砂礫を多くカクセン石を少量含み鈍い黄橙色。14 は口径 19.4 cm。器壁の調整は不明。粗い砂礫・赤色粒を多く含み鈍い黄橙色。15・16 壁で 15 は口縁底部



Ph.14 SX17遺物出土状況（西から）



Ph.15 SX17遺物出土状況（東から）



Ph.16 SX19（南から）



Ph.17 SX19遺物出土状況（西から）

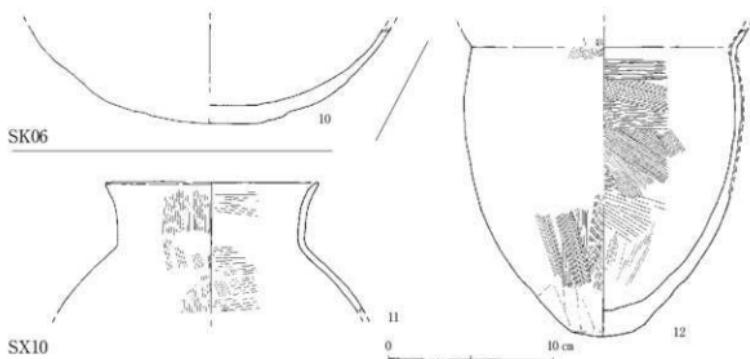


Fig. 8 SK06 · SX10出土遺物実測図 (1/3)

を欠く。球形胴の古式土師器で径 22.4 cm。外面下半はナデで煤が付着。内面は右上がりケズリ。3 mm 以下の石英粒を多く含み鈍い黄橙色。16 は口頸 22.6 cm。口頸・内面は調整不明。胴外面はタテハケ。3 mm 以下の石英粒を含み灰黄色。17 は口縁を欠く長頸壺で扁球形の胴径 17.8 cm。器壁は荒れ調整不明。4 mm 以下の粗い石英粒を含み浅黄橙色。18～20 は壺。18 は口径 14 cm。薄い器壁で調整は不明。4 mm 以下の粗い石英粒を含み浅黄橙色。19 は口径 15 cm で調整不明。明赤褐色～黄褐色。20 は大型壺底部で外面突帯にはナナメタキの刻目。以上は横位の並行タタキ以下は細かなタテハケ。被熱で器壁が剥離し煤が付着する。内面底面は指頭圧にタテハケ、以上は細かなナナメハケ。4 mm 以下の粗い石英粒を含み浅黄橙色。内面灰褐色。20・21 は高壺。21 は薄い器壁の壺部で口径 29.6 cm。下位で

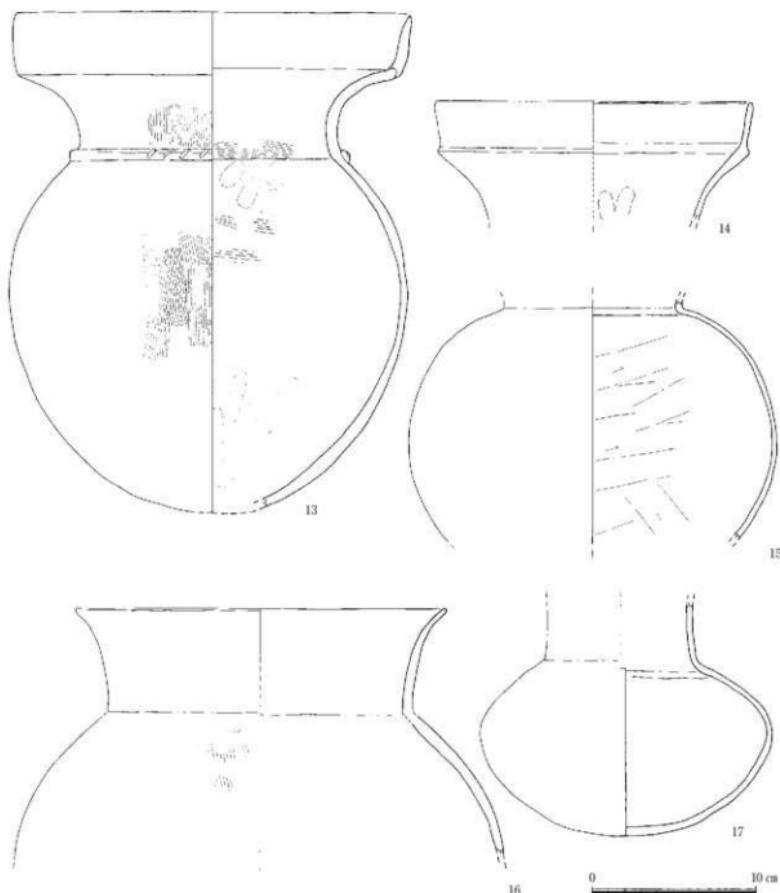


Fig. 9 SX17出土遺物実測図.1 (1/3)

屈曲。調整不明。3 mm以下の石英粒を含み鈍い黄橙色。22は坏部下半で内外面にタテ・ナナメハケ。4 mm以下の粗い石英粒を多く含み浅黄橙色。後期後半。

SX19 (Fig.7 Ph.16・17) SX19は調査区北側に位置し、SX17・26と切り合う。古墳時代のSD04に中央を切られる。平面は凹凸の著しい不整形で、 $3.7 \times 3.8 + a$ m深さ15～65cmを測り、1m弱の小土壤が多数切り合い顕著である。包含層f層を切って掘り込まれる。遺物は床面近くから上位まで分布する。

出土遺物 (Fig.11 Ph.20) 23は後期前半の平底の壺。口頭を欠くが胴径30.6cmを測る。調整の大半



は不明で、内面の一部に粗いナナメハケが残る。粗い砂礫を多く含み浅黄橙色。24は小さなレンズ底を残す球形洞の壺で胴径25cm。外面上位は粗いナナメハケ・下位と内面は細かなナナメハケ。4mm以下の石英粒を含み橙～灰褐色。25・26は壺。25は外面口唇下に凹線。以下にヨコナデ。内面ヨコハケ後ヨコナデ。鈍い黄橙色。26は外面胴部平行タキ後ヨコナデ。内面は粗いナナメハケ後ナデ。鈍い黄橙色。27は高坏の屈折部以下で調整不明。粗い砂礫を多く赤色粒を含む。橙色。28は丸底壺底部で外面にハケメが残る。

Ph.18 D3・SP2 (西から)

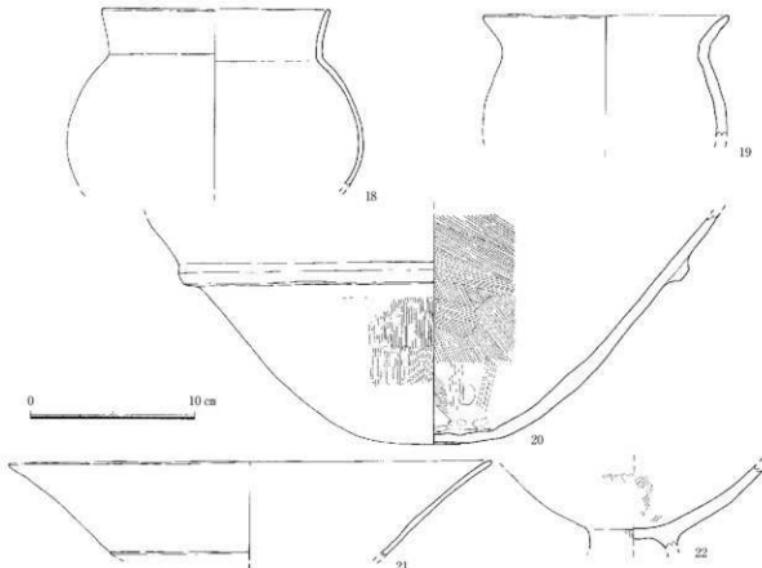


Fig.10 SX17出土遺物実測図.2 (1/3)

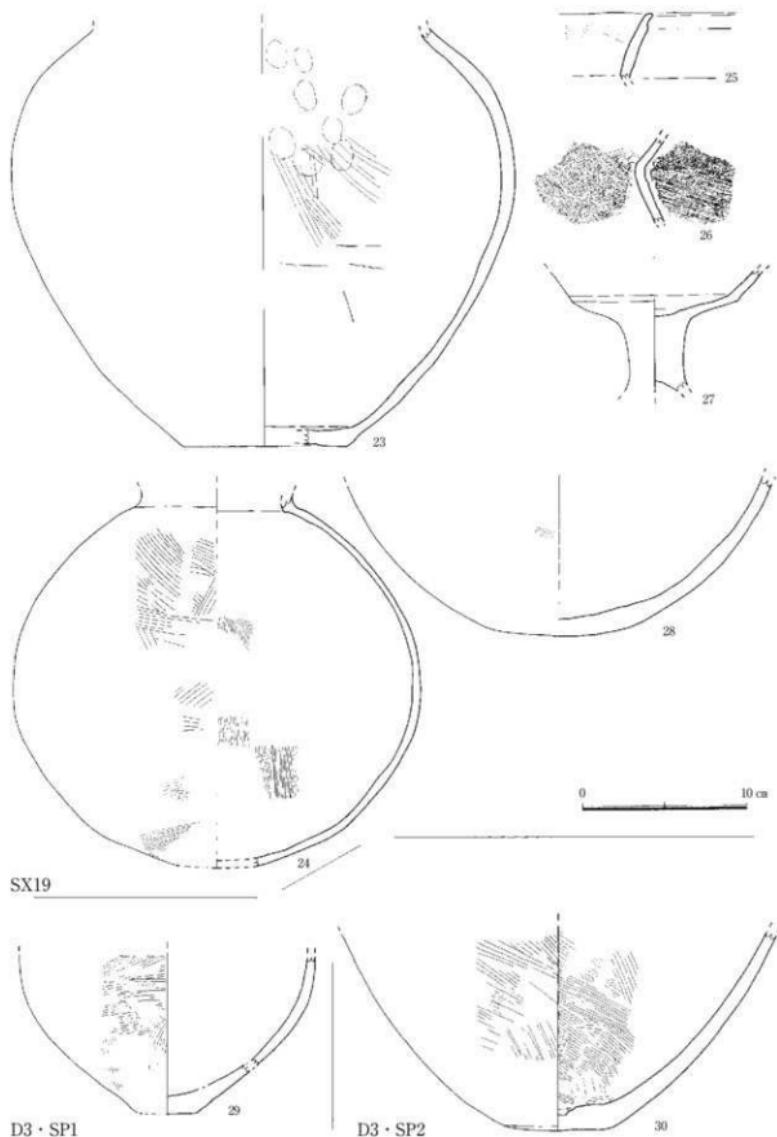


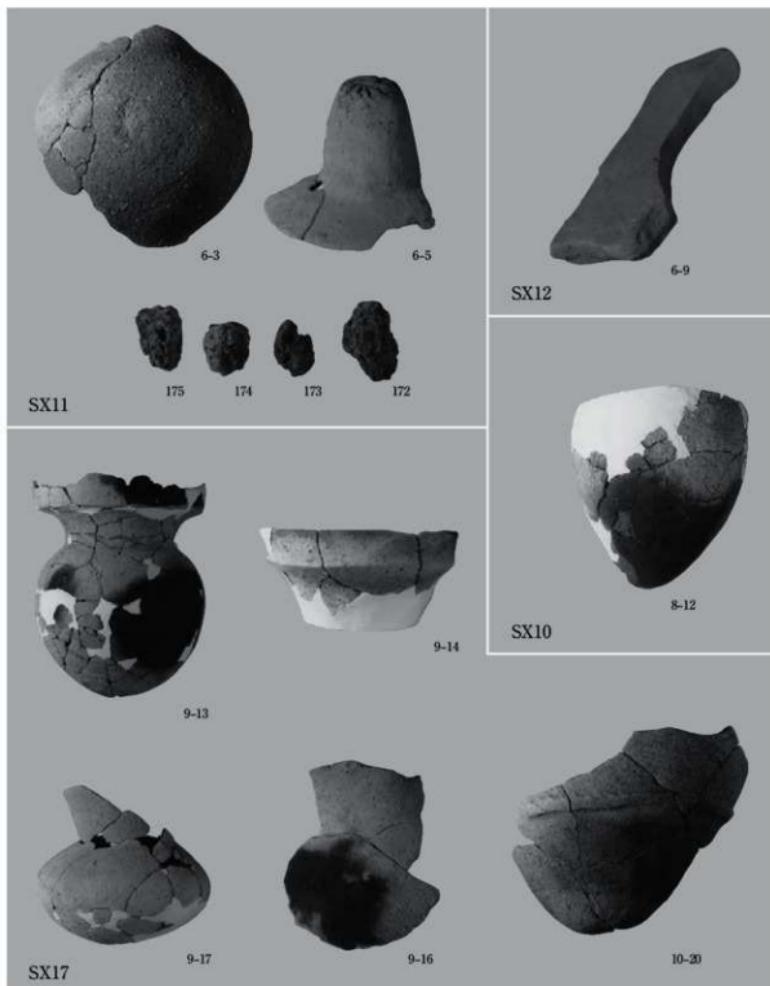
Fig.11 SX19 · SP出土遺物実測図 (1/3)

2). 土壙 土壙は南東部で SK06・15 の 2 基を検出した。

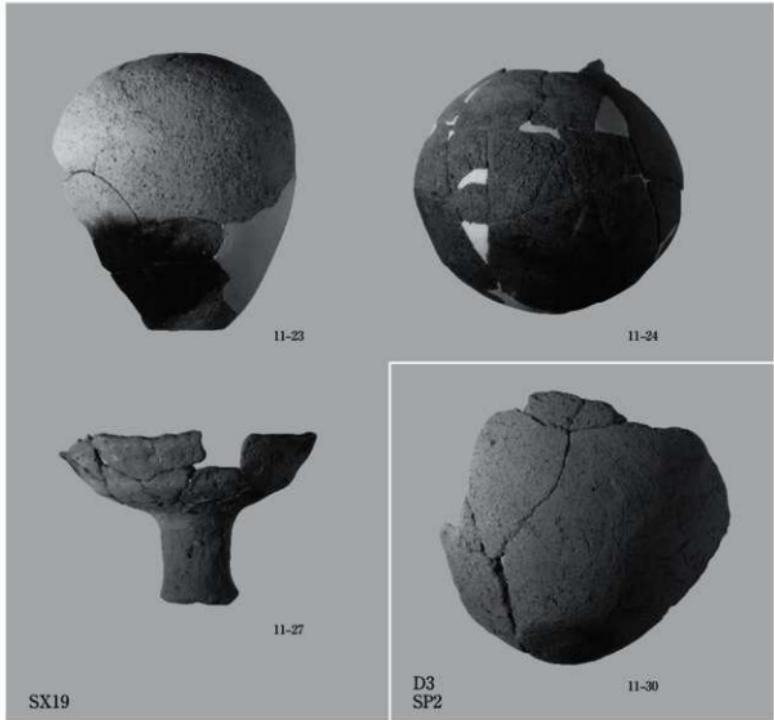
SK06 (Fig.7 Ph.9) E3 グリッドに位置し、SX05・10 間に位置する不定台形で 1.35×1.28 m 深さ 25 cm を測り、底面近くに土器が出土する。

出土遺物 (Fig.8) 10 は丸底甕で器壁は調整不明。外底に茎状の圧痕が数カ所残る。粗い砂礫を多く含み灰白色を呈する。

Fig.7SP01・02 は SX10 内のピットである。底面近くに土器片を出土する。



Ph.19 弥生時代出土遺物. 1



Ph.20 弥生時代出土遺物.2

3. 古墳時代の調査

古墳時代の遺構は全面に展開し、後期の遺構は包含層 f 層黒灰色粘質土上面で多く検出されるが、初頭～前半期の遺構は前述のように踏み荒らされた状況のため、地山面まで下げ検出を行っている。

1). 初頭～前半期の遺構 土壌 1 基・土取り状不整形土壌 1 基・溝 1 条で、溝 SD02 が中心となる。

溝 SD02 (Fig.12 Ph.22～28) SD02 は調査区を横断する大溝で方位を N - 43° - E にとり現街区に並行する。幅 2～4.4m 深さ 70 cm 程を測り、底面は北東から南西に緩傾斜して下がる。覆土は暗灰褐色・黒灰色粘質土の 1・2 層・暗灰褐色～黒灰色中砂～混砂土の 3 層・上層・暗灰褐色・黒灰色粘質土の 4・5 層・中層・地山土ブロックを含む黒灰色粘質土の 6～8 層・下層に分離し遺物を取り上げている。土層は底面と逆に南西から北東に傾斜し、上層には 7・8 世紀代の遺物が出土する。

出土遺物 (Fig.13～15 Ph.30・31) 31～41 は 1 層出土。31～37 は須恵器。31 は壺蓋で口径 15.2・器高 24 cm。外面灰・内面明灰色。32 は高壺の蓋か。口径 20 cm。外面は自然釉。青灰色。33 は肩が屈折する長頸壺の肩部で径 19 cm。外面上半は自然釉。下半は回転ケズリ後回転ナデ。外面灰・内

面明灰色。34は無蓋高坏片。屈曲部下は回転ケズリ後回転ナデ。焼成がややあまく赤褐色。35は脚付盤片。内底に同心円当具痕が残る。36・37は甕口縁部。36は頭部下に外面木目直交縦位の平行叩後カキメ。内面同心円当具痕をナデ。口頭部は灰がかぶる。外面淡灰・内面灰色。37は口径25.9cm。口縁端部が外方に屈曲し口唇に凹線2条を施す。外面頭部はカキメ。口縁上面は灰がかぶる。灰色。38は五様式系土師器甕。口径13cm。外面肩部に右上がり平行タタキ。内面ケズリ。砂礫を多く含み明赤褐色。146は土師器移動式甕の底小片。砂礫を多く含み鈍い黄橙色。39は須恵器甕底部の土器片円盤。径7.3cm 62g。周縁を打ち欠き整形。40は繩目叩きの平瓦片。側面はケズリ後ヘラナデ。厚1.4cm。暗灰色。41は鉄漆炉底塊で上面は暗綠灰色微細粒状で軟質・下面は炉底粘土が熔着。

以上7世紀前半～8世紀前半を多く含む。

42～50は2・3層出土。42～45は須恵器。42・43は坏蓋。口径・器高はそれぞれ13×3.6cm・13×4.1cm。灰色。42は石英粒をやや多く43は石英粒を微量含む。44は有蓋高坏部片。受部径15.2cm。胎土は精良で灰色。45は坏で受部径15cm。石英粒を含み外面暗灰色・内面灰色で蓋と合わせて焼成。46～



Ph.21 SD02西壁土層断面（東から）

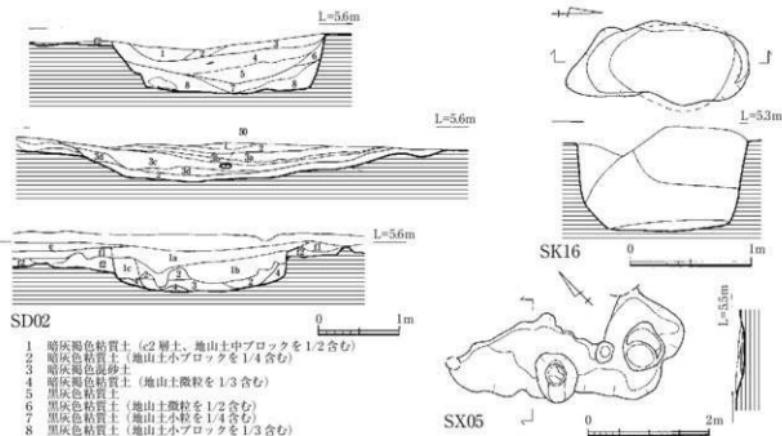


Fig.12 SD02土層断面 (1/60) · SK16 (1/40) · SX05実測図 (1/80)

48は土師器。46は甕口縁部。石英粒・赤色粒を多量に含み灰黄色。47・48は高坏。47は坏部片で体部径10.8cm。細砂粒・赤色粒を含み橙色。48は脚部。径16cm。脚柱外面はタテケズリ後ヨコナデ据部内面は細かなヨコハケ。焼成前の穿孔を対面に4箇所施す。細砂粒・赤色粒を少量含み鈍い橙色～浅黄橙色。49(Ph.30)は所謂天蓋石。結晶片岩の海浜砾に貝の径0.4～1.7cmの穿孔を8孔残して周縁を敲打し整形。53×45×22cm・60gを測る。50は径20cm以上の針葉樹の1/12分割のミカン削材で119.5×8.8×4cmを測る。脇枝付け根を1箇所含む。腐朽が進む。以上IV A・IV B期の須恵器をまとめて含む。

51～61は4層の中層砂層出土。51～58は土師器。51は近畿・山陰系の二重口縁壺。全周遺存し

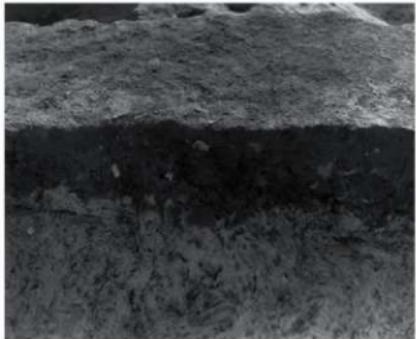
口径22.6cm。外面はヨコナデ・ケンマ内面はヨコナデ。頸部の器壁が厚い。4mm以下の石英粒を多量に・赤色粒を少量含み灰白～浅黄橙色。52は口縁・肩部の一部を欠く堆。口径7.9cm高11.5cm。調整は不明瞭。外面胴部にタテハケが残る。胎土精良で鈍い橙～黄橙色。53は布留系高坏脚部片。脚径11cm。調整不明。胎土精良で橙色。54は半島系炉形土器の低平な脚部と思われ、脚径17.4cm。内外面にナナメハケ後緩いナデ。3mm以下の石英粒をやや多く、金雲母を少量含み鈍い橙～黄橙色。55は短頸壺の口縁部で口径14cm。外面タテハケ後ヨコナデ。内面ヨコハケ後ヨコナデ。3mm以下の石英粒をやや多く、金雲母を少量含む。灰白色。56は布留式甕片。口径16cm。口縁内外はヨコナデ。口唇上面を面取りし内面が突出。肩部外面は剥離し調整不明。内面は右上がりケズリか。3mm以下の石英粒を含み外面黒灰～灰黄色・内面灰白～灰黄色。57は胴径約23cm程の庄内



Ph.22 SD02西半部（西から）



Ph.23 SD02東半部（西から）



Ph.24 SD02銅鎚出土状況（東から）



Ph.25 SD02板出土状況（南から）



Ph.26 SD02遺物出土状況（北から）

式壺胴部片。外面左上がりの細筋タタキ。煤が付着。内面は不明瞭だがケズリ。石英粒を多量に含み外面黒灰～灰黄褐色・内面灰黄褐色。**58**は土師器壺胴部片の土器片円盤。径5.8 cm・50g。周縁を打ち欠き整形。**59・60**は円柱状の大型管状土錐で全面を指頭圧・ヘラナデ調整。円孔の径が小さい。**59**は長6.8径4.0孔径1.2 cm・138g。石英粒・赤色粒をやや多く含み鈍い黄橙色。**60**は長6.9径4.3孔径1.2 cm・165g。粗い石英粒・赤色粒をやや多く含み鈍い橙色。**61**は合わせ鋳型铸造の有茎三角銅鎚で、鎚を有し茎部に低い筋帯を鋳出す。全長5.6・刃部長3.5全幅2.0厚5 mm・8.13g。鎚範が上下で5 mm左右で2.5 mmずれる粗製品で、左端部が鋳欠ける。刃部両側と先端部を使用により損ずる。黒褐～茶褐色・地金は赤銅色。以上古墳時代初頭を中心を成す。

62～64は7・8層の下層出土弥生土器で、逆「く」字口縁の二重口縁壺。古墳時代初頭土師器を混じるものまとまった弥生土器が出土する。**62**は口外径34 cm。口唇端部にハケ工具で凹線を施す。口縁外面は粗いナナメハケ後ヨコナデ頭部はタテハケ後ケンマ。内面は粗いヨコハケ。石英粒を多量に含み灰白色。**63**は口外径18 cm。口唇端面を凹線気味に、口縁外面はヨコハケ後ヨコナデ頭部はタテハケ後ヨコナデ。内面はヨコハケ。石英粒をやや多く含み浅黄橙色。**64**は口外径17 cm。口唇端面を凹線気味に、口縁外面・頭上部はヨコハケ後ヨコナデ・以下を粗いタテハケ。内面はヨコハケ・口縁は粗くヨコナデ。石英粒を多量に含み灰白色。以上後期中～後半の時期を示し、SD02が該期の溝を改削している可能性も考えられる。

Fig.13は2・3層混入の初頭～前期前半期の資料。**65**は五様式系の二重口縁壺で口径20 cm。調整は不明瞭だが頭部外面にタテハケがのこ

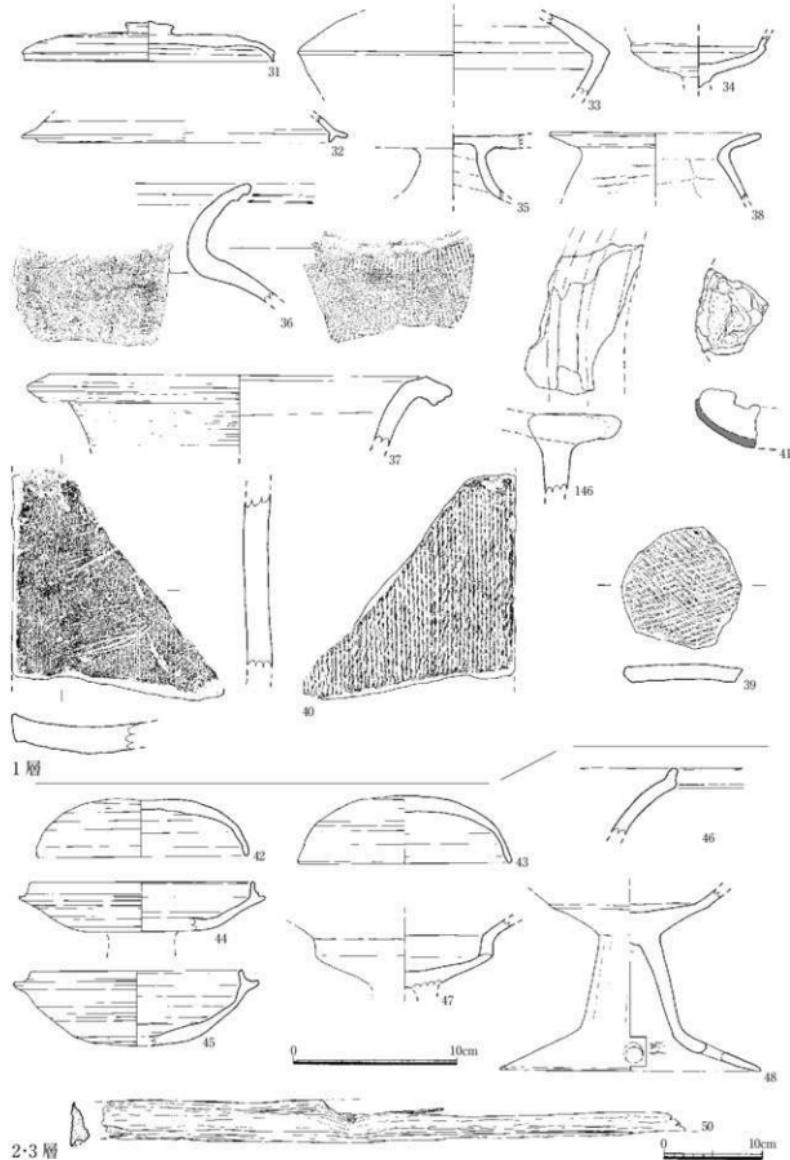


Fig.13 SD02・1~3層出土遺物実測図 (1/3)



Ph.27 SD02遺物出土状況（北から）



Ph.28 SD02遺物出土状況（北から）



Ph.29 SK16（南東から）

る。石英粒を多量、鈍い黄橙色。66は近畿系の二重口縁壺。口縁外面にハケ工具で4条の波状文・屈折部に刻目。内面ナナメハケ。頸部に焼成前の径12cm以上の円形窓を開ける。石英粒を多量、鈍い黄橙色。67は焼成前の底部穿孔鉢。口径17.8器高9.6cm。口縁端は尖る。外面調整不明。内面ナナメハケ。レンズ底で径2cmの穿孔。石英粒を多量、鈍い黄橙色。68・69は山陰系低脚壺の脚部。68は小片で径9cm。調整不明。内面中央に径8mm程の体部との押圧痕。石英粒・赤色粒を少量、浅黄橙色。69も小片で径8.2cm。調整不明。内面に同様の径6mm程の押圧痕。石英粒を少量、浅黄橙色。70・71は小形器台。70は口径10・器高19.9cm。体部内外ナデ。外面脚上位タテヘラナデ・以下ナナメハケ。対面に2孔焼成前の穿孔。71は小片で径15.5cm。内外にナナメ・ヨコハケ後ヨコナデ。胎土精良で鈍い黄橙色。72は高坏体部片。径30cm。外面は粗いナナメハケ。内面ナナメハケ後ヨコナデ。石英粒・赤色粒を少量、橙色。73～82は甕。73は口径13cm。外面タテハケ内面ナナメハケ後ナデ。石英粒・赤色粒を少量、外面黄橙～黒褐色・内面鈍い黄橙～褐灰色。74は東海系。「S」字様の二重口縁で口径16.7cm。調整不明。石英粒を多量、鈍い黄橙色。75は布留系。口径17cm。端部は丸く収め内面が突出。口縁内外ヨコナデ・胴部外面ハケ・内面上位以下ケズリ。石英粒を含み灰白～鈍い黄橙色。76は口径15.2cm。口縁内外ヨコナデ・胴部外面粗いハケ・内面上位以下右上がりケズリ。石英粒をやや多く含み外面鈍い黄橙・内面灰褐色。77は短頸で調整不明瞭。内面に細かなハケメ。石英粒を含み灰黄褐色。78・79は山陰系。調整不明石英粒を含み鈍い黄橙色。80は庄内系。外面左上がり細筋タキ。内面指頭圧痕・ナデ。石英粒・金雲

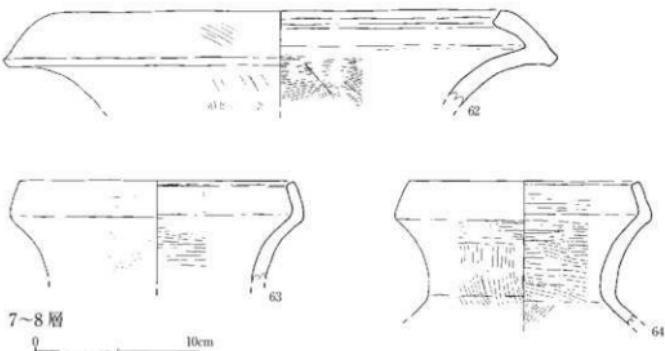
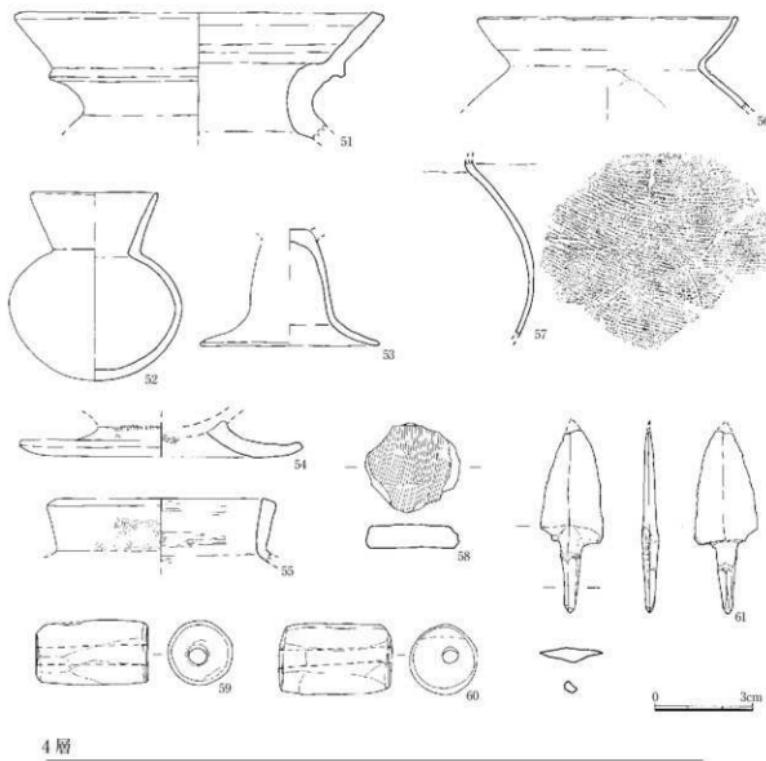
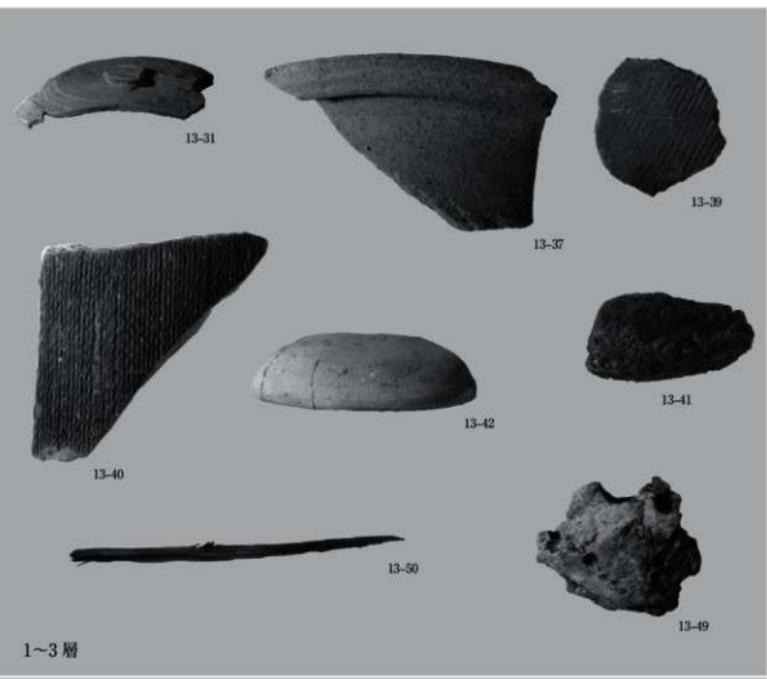
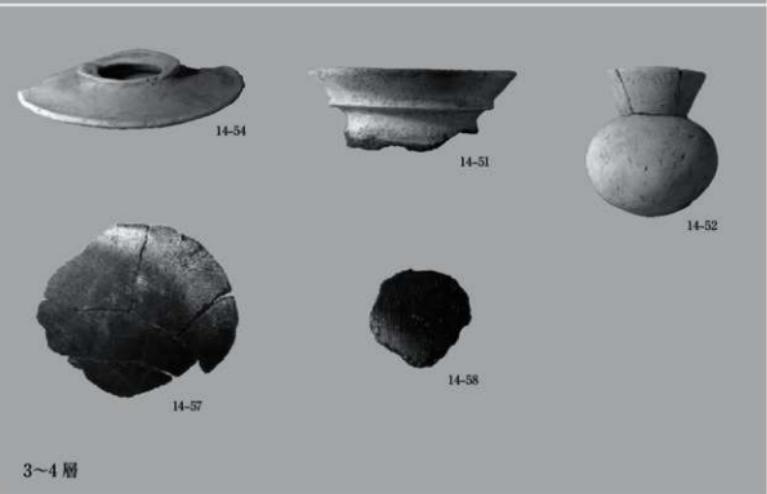


Fig.14 SD02・4~8層出土遺物実測図 (1/3・2/3)



1~3 層



3~4 層

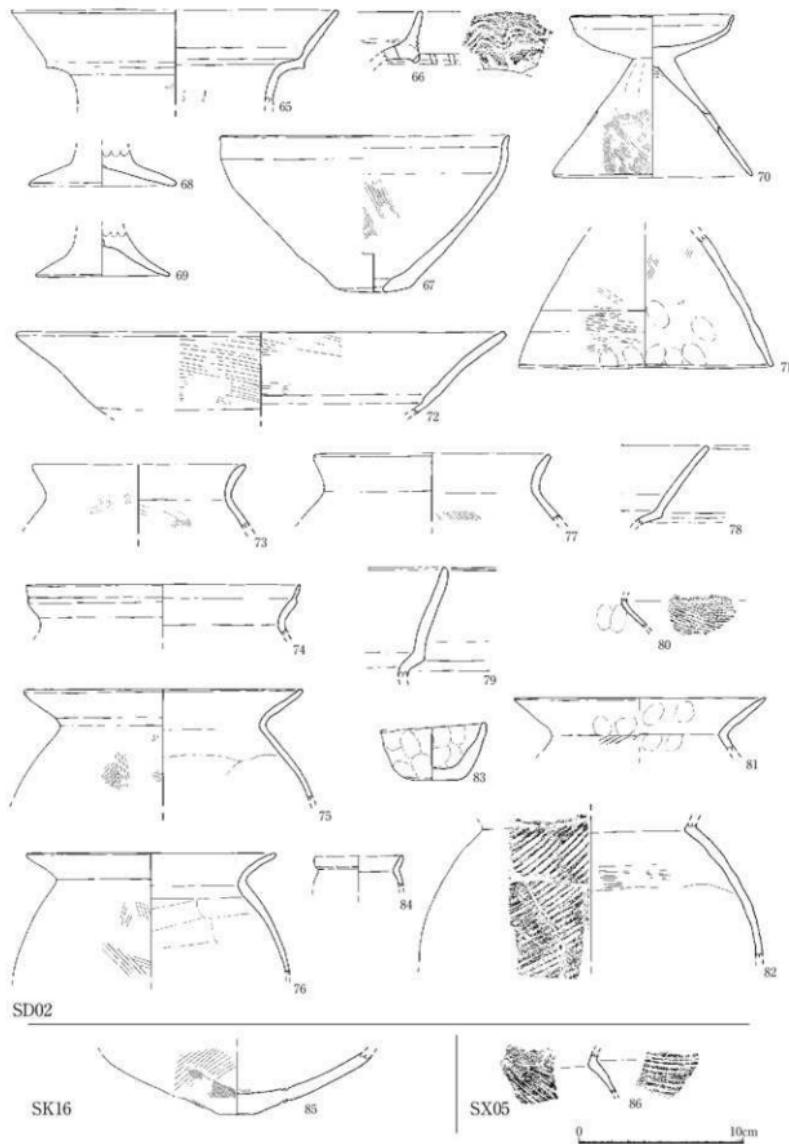
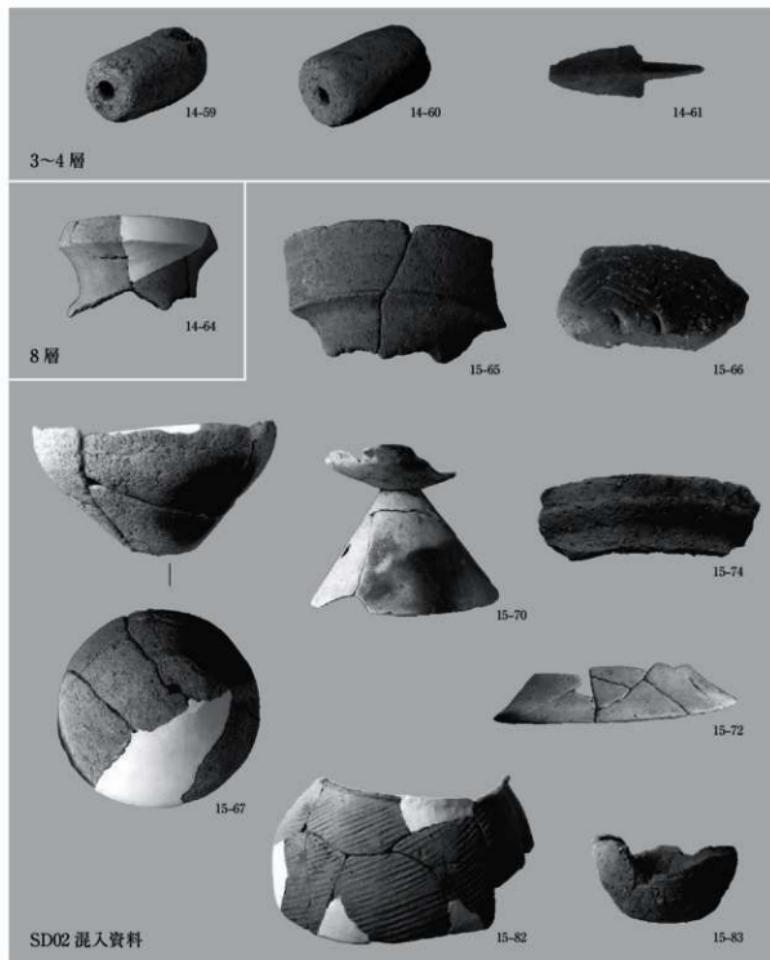


Fig.15 SD02・SK16・SX05出土遺物実測図 (1/3)

母少量含み鈍い黄橙色。81・82は五様式系。口径15.4cm。胴外面右上がりタタキ。内面指頭圧痕。石英粒・金雲母少量含み鈍い橙色。82は粗い右上がりタタキ。内面ヨコハケ・ナデ。石英粒少量鈍い黄橙色。83・84はミニチュア。83は口径6.4器高3.6cm。内外面指頭圧。鈍い黄橙色。84は壺形で口径5.4cm。黄橙色。

土壤 SK16 (Fig.12 Ph.29) SK16はC2グリッドに位置し SX11を切る。140×66cmの平面楕円形で深さ75cmの断面逆台形。底面が平坦。

出土遺物 (Fig.15) 85は五様式系壺底部で外面タタキ後一部ハケ内面はハケ後ナデ。外面赤橙～黒



Ph.31 SD02出土遺物.2

褐色内面鈍い黄橙～黒褐色。他土師器甕 30 片程出土。

不整形土壙 SX05 (Fig.12 Ph.29) E3 グリッドに位置し平面は凹凸の著しい不整形。3.9 × 1.4 m 深さ 10 cm 程で柱穴と切り合う。

出土遺物 (Fig.15) 86 は五様式系甕で外面タタキ内面は粗いハケ。

2). 後期の遺構 調査区のはば全域に広がるが北東部に柱穴の集中がみられる。黒灰色粘質土 E2 層上面で多く検出される。溝 1 条・土壙 4 基・土取り状不整形土壙 2 基・井戸状遺構 1 基を検出した。多くの足跡は該期のものと考えられる。SD02 は深さ 30 cm 程の溝で砂が堆積し残存している。

溝 SD04 (Fig.16 Ph.32 ~ 38) SD02 はほぼ同方向の方位 N ~ 40° ~ E をとり、調査区南側にかかる溝で、緩やかに蛇行する。幅 1.6m 深さ 45 cm 程を測り、底面は SD02 とは逆に南西から北東に緩傾斜して下がり偶蹄類と思われる足跡で凹凸が著しい (Ph.35 ~ 37)。覆土は薄い暗褐色粘質土 (1 層) 下、暗灰褐色シルト～暗灰色中砂 (2 ~ 4 層) の上層・暗灰褐色粘質土・黒灰色粘質土 (5 ~ 6 層) の下層に分離した。北東部床上に灰色中砂 (7 層) が薄く遺存し、足跡はこの上面から踏み込まれる。7 ~ 5 層までが水平に堆積後上層の砂は南西端部で厚さ 45 cm・北東端部で 10 cm 弱と薄く堆積する。



Ph.32 SD04 西壁土層断面（東から）

出土 遺物 (Fig.17 Ph.45)

87 ~ 90 は上層出土。87 ~ 89 は須恵器。87 は提瓶で胴径 20.4 高 128 cm。灰色。88 は坏蓋。口径 11.8 器高 33 cm。外面鈍い橙色内面灰色。89 は环身。受部径 12.6 器高 38 cm。口唇を周 1/2 程 6 mm 切り取る。外面淡灰色内面暗灰色。90 は土師器甕。口径 15 cm。外面タテハケで煤付着内面頸部下ケズリ。鈍い橙色。以上 IV 期の須恵器が占める。91 ~ 105 は下層出土。91 ~ 97 は須恵器。91 は高坏蓋。口径 16.6 器高 4.6 cm。天井部・摘上面にカキメ。暗灰色。92 は



Ph.33 SD04 東壁土層断面（西から）



Ph.34 SD04 東半部（西から）

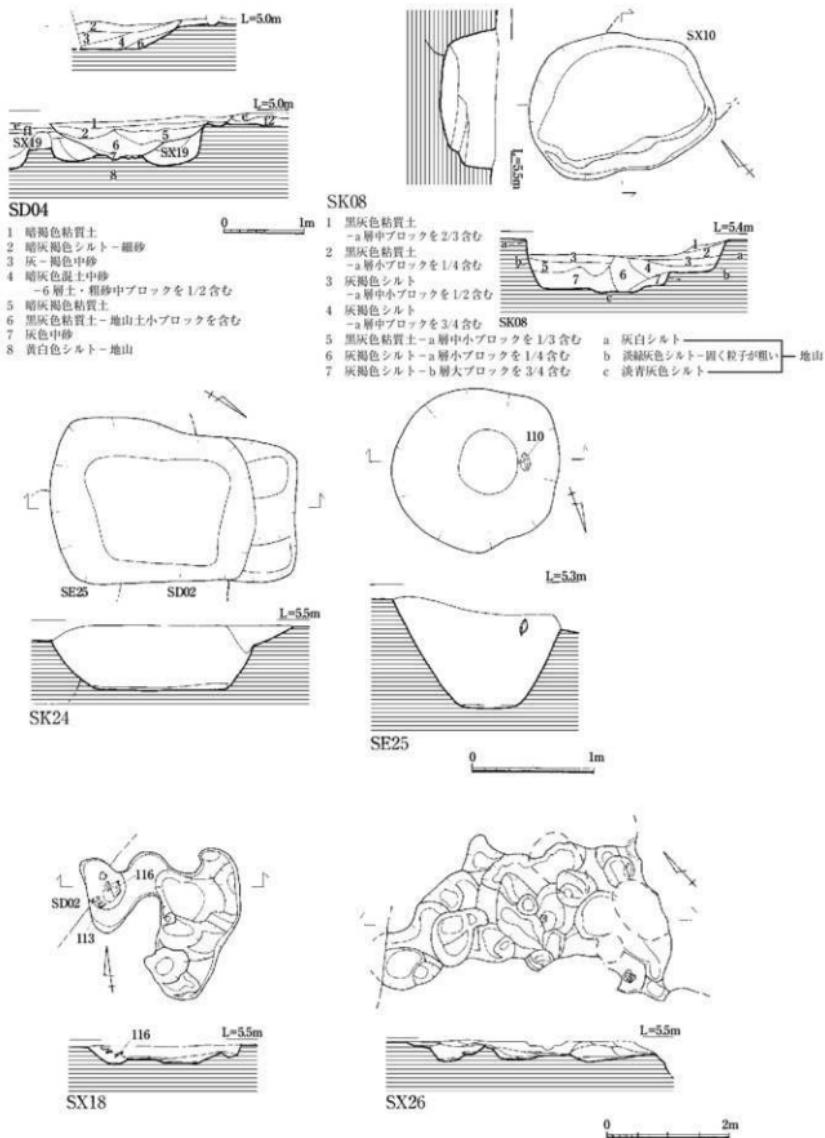


Fig.16 SD04土層断面 (1/60)・SK08・24・SE25 (1/40)・SX18・26実測図 (1/80)

坏蓋。口径 14.2 器高 4.7 cm。淡灰色。93 は坏身。受部径 12.4 器高 4 cm。外底にヘラ記号・灰かぶり。暗灰色。94 は坏身。受部径 13.6 cm。灰色。95 は壺。胴径 14 cm。中・上位にカキメ・以下に回転ケズリ。内底に灰かぶり。暗灰色。96 は趣。胴径 9.5 cm。頸部にヘラ記号・胴沈線間にカキメ工具の連続刺突。頸肩部に灰かぶり。暗灰色。97 は高坏脚部。ねじり痕を回転ナデ。胎土精良暗灰色。98 は軟質壺。外面に格子タタキ・内面に平行弧当具痕。胎土精良鈍い橙色。99 は土師器坏。口径 12.4 cm。内面ケンマ。明赤褐色。100 は土師器ミニチュア。口径 5.2 器高 2.9 cm。浅黄橙色。101・102 は土師器土器片円盤。101 は径 6.8 cm。周縁は打ち欠き。102 は径 4 cm・15g。周縁は磨り取り。103 は砂岩荒砥。端部で 6.1 鞍部で 4 cm。4 側を砥面。半折後手持ち砥石・2 側面両端面を叩石に転用。104 は炉底塊。隅破片で上面大小気泡、径 25 mm の孔・下面顆粒状で一部平滑。側面に炉壁粘土熔着。105 は炉底塊。3 面破断。上面暗緑灰細粒軟質で滑らか・下面小さな気泡で酸化土砂付着。側面に炉壁粘土熔着。

以上Ⅲ B～Ⅳ期を含む。

土壤 SK08 (Fig.16 Ph.39・40) D2 グリッドに位置し SX10 を切る。平面 152 × 118 cm の隅丸方形に近く深さ 43 cm の 2 段土壙で底面は平坦。地山土ブロック混じりの黒灰～灰褐色シルト・粘質土で埋め戻される。

出土遺物 (Fig.18) 107 は土師器高坏脚柱。石英粒を多量に含み浅黄橙色。

土壤 SK24 (Fig.16 Ph.41) A1 グリッドに位置し SD02・SE25 を切る。平面 200 ×



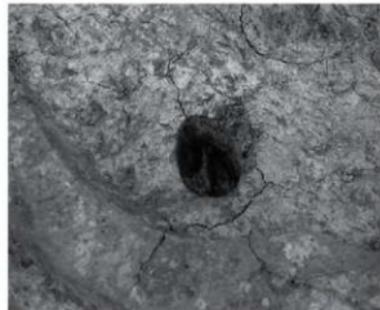
Ph.35 SD04底面足跡（東から）



Ph.36 SD04底面足跡（東から）



Ph.37 SD04底面足跡（南から）



Ph.38 C2グリッド足跡（東から）

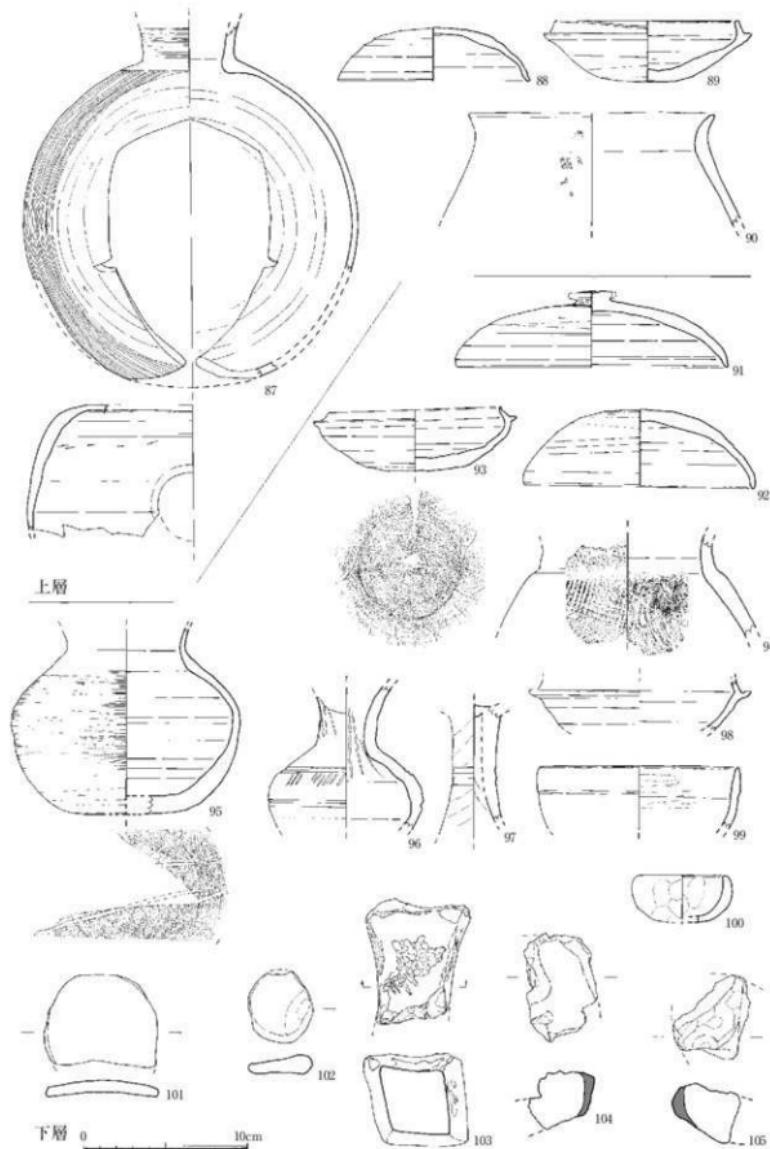


Fig.17 SD04出土遺物実測図 (1/3)

135 cmの隅丸方形で深さ 53 cm。北側が幅 30 cm 程の階段状を成す。底面は平坦。地山土ブロック混じりの黒灰色粘質土で埋め戻される。

出土遺物 (Fig.15) 108 は須恵器坏身。受部径 12 cm。灰色。以上Ⅳ期の時期を示す。

井戸 SE25 (Fig.16 Ph41) A2 グリッドに位置し SD02 を切り SK24 に切られる。平面 138 × 134 cm

の円形で深さ 93 cm・底面径 52 cm の断面逆台形。素堀りで底面から 20 cm 上位が湧水面。

出土遺物 (Fig.18) 109 ~ 112 は須恵器。

109 は坏蓋。口径 12.6 cm。胎土精良で暗灰色。110 は坏身。受部径 13.8 器高 3.9 cm。外面上に他片が焼き付き。底面が著しい灰かぶり。暗灰色。111 は坏身。受部径 12 cm。胎土精良暗灰色。112 は土師器ミニチュア。口径 5.3 器高 4.1 cm。鈍い黄橙色。

以上Ⅲ B ~ Ⅳ期が出土する。

不整形土壙 SX18 (Fig.16 Ph.42・43) B2 グリッドに位置し SD02 を切る。平面は凹凸の著しい不整形。2.7 × 2.6 m 深さ 28 cm 程で



Ph.39 SK08土層断面（西から）



Ph.40 SK08（西から）



Ph.41 SK24・SE25（東から）



Ph.42 SX18遺物出土状況（東から）



Ph.43 SX18（西から）

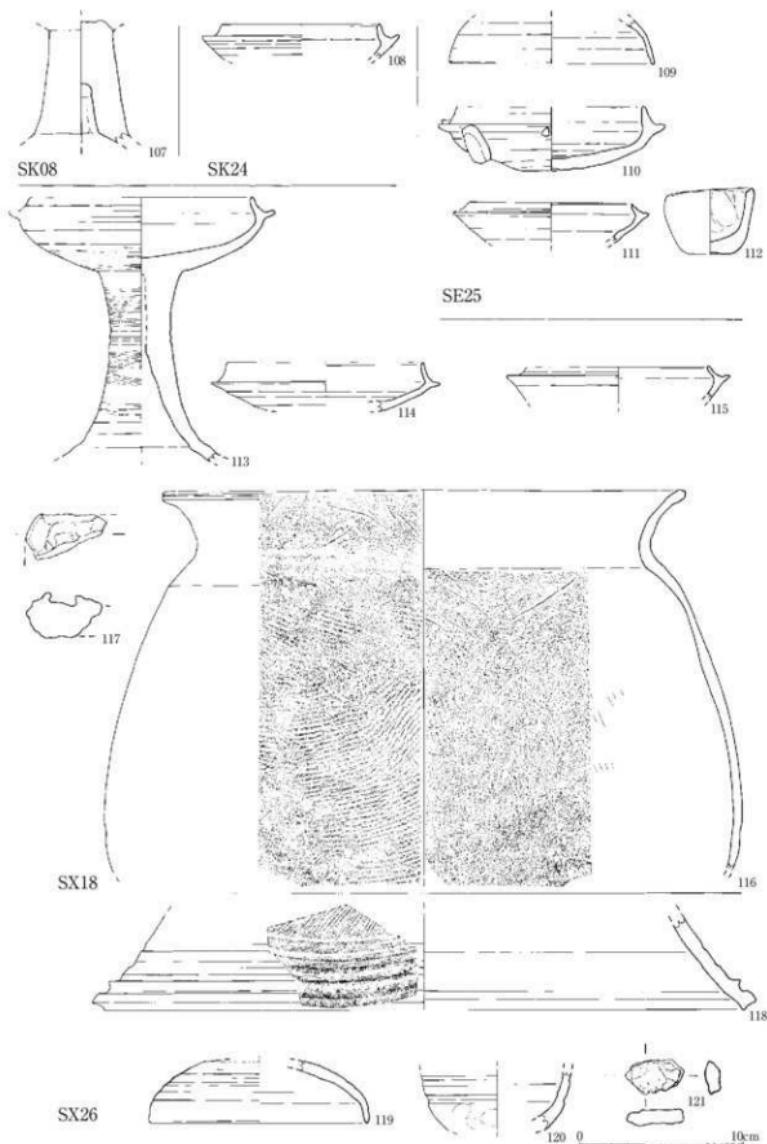


Fig.18 SK08·24·SE25·SX18·26出土遺物実測図(1/3)

80 ~ 140 cm 程の小土壙が重なる。北西部に遺物が柱集中する。

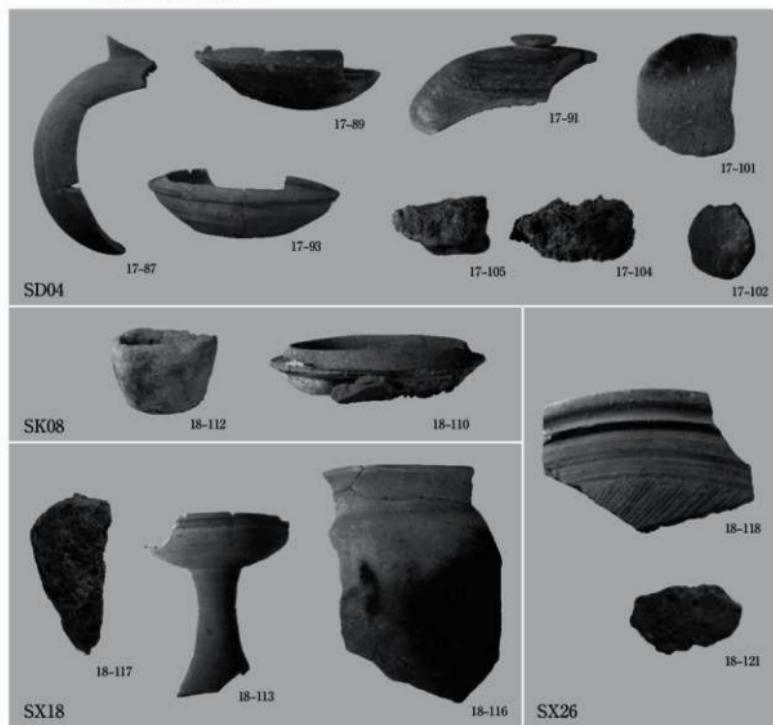
出土遺物 (Fig.15) 113 ~ 115 は須恵器。113 は有蓋高坏。受部径 16.5 cm。体部下半から脚部にカキメ。灰色。114 は坏身。受部径 14 cm。体部外面灰色他灰白色。115 は坏身。受部径 13.6 cm。灰色。116 は軟質壺。口径 32 厘米 径 39.2 cm。胴外面平行タタキ内面平行弧当具痕。口唇外面に沈線。外面橙~灰褐色、内面橙色。117 は炉底塊。隅破片で 2 面破断。上面小気泡暗緑灰細粒軟質、径 15 mm の孔・下面中小気泡でざらつく。酸化土砂付着。以上 III B ~ IV 期が出土する。

不整形土壙 SX26 (Fig.16 Ph.44) SX18 の東側に位置し SX19 を切る。平面は凹凸の著しい不整形。4.7 × 2.4 m 深さ 30 cm 程で 50 ~ 130 cm 程の小土壙が多数重なる。

出土遺物 (Fig.18) 118 ~ 120 は須恵器。118 は壺で口径 40.4 cm。内面灰かぶり。119 は坏蓋。口径 13.5 cm。121 は流出滓。3.5 × 2.2 × 1 cm・7 g。以上 IV 期が出土する。



Ph.44 SX26 (西から)



Ph.45 古墳時代出土遺物

4. 古代の調査

古代の遺構は溝 SD02 周辺に分布し、灰褐色粘質土・混砂土（d・e 層）中から掘削されると思われるが下面の包含層 f 層黒灰色粘質土上面で多く検出した。井戸 3 基・不整形土壙 4 基を検出している。SD02 は深さ 20 cm 程の窪地で残存している。

井戸 SE03 (Fig.19 Ph.46・47) E2 グリッドに位置し SD02 を切りほぼ東西方向に軸をとる。平面 254 × 208 cm の隅丸方形で深さ 120 cm・底面径 155 cm の断面逆台形。素堀りで底面から 25 cm 上位が湧水面となる。西方向に幅 40 cm 程放射状に 2 条の浅い小溝があり、釣瓶を引く際の減損と考えられる。底面に 10 cm 程細砂が堆積し (6 層) 以上は地山ブロック混じりの暗灰褐色客土で埋め戻される。



Ph.46 SE03 土層断面（南東から）

出土遺物 (Fig.20) 122 は須恵器か新羅無釉陶器甕胴部片。外面格子目タタキ内面平行弧当具痕。灰色で断面鈍い黄橙色。123 は土師器高台坏。口径 14.4 cm。橙色 124 は土師器蓋。径 9 cm。胎土精良で橙色。8 世紀前半～9 世紀初を示す。

井戸 SE09 (Fig.19 Ph.48・49) D2 グリッドに位置し SD02・SX10 を切りほぼ南北方向に軸をとる。平面 193 × 160 cm の隅丸方形で深さ 125 cm・底面径 74 cm の断面舟底形の緩い 2 段掘り。素堀りで底面から 15 cm 上位が湧水面。底面に砂の堆積はみられず 5 cm 程粘質土が堆積し井戸以外の可能性もある。以上は地山ブロック混じりの暗灰褐色客土で埋め戻される。

出土遺物 (Fig.20) 125



Ph.47 SE03（南東から）

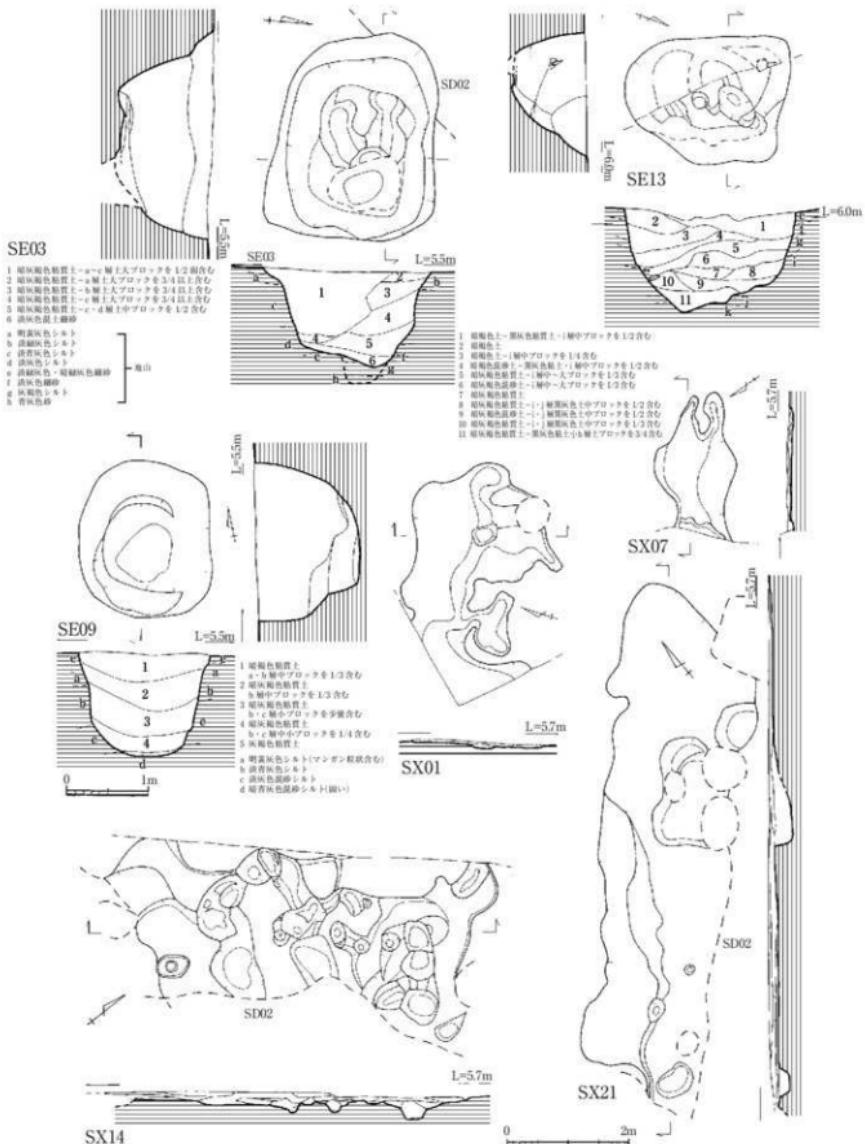


Fig.19 SE03・09・13 (1/60)・SX01・07・14・21 (1/80) 実測図

は須恵器高坏脚部。脚径 10.4 cm。暗灰色。126 は須恵器坏口縁。淡灰色。127 は須恵器か新羅無釉陶器壺胴部片。外面格子目タタキ内面平行弧当具痕。暗灰色で断面鈍い橙色。8世紀代を示す。

井戸 SE13 (Fig.19 Ph.50) C1 グリッドに位置し SD02 を切り N - 22° - W に軸をとる。平面 198 × 154 cm の隅丸方円形で深さ 125 cm・底面径 155 cm の断面舟底形。素堀りで底面から 25 cm 上位が湧水面となる。SE03 同様東方向に幅 20 cm 程放射状に 2 条の浅い小溝があり、釣瓶を引く際の減損と考えられる。底面から 25 cm 程は客土で上面に 15 cm 程混砂土堆積し（9 層）中位以上は地山ブロック混じりの暗灰褐色客土で埋め戻す。



Ph.48 SE09 土層断面 (東から)



Ph.49 SE09 (南から)

出土遺物 (Fig.20) 128
は新羅無釉陶器壺胴部片。
外面格子目タタキ後カキ
メ・ナデ。内面平行當具後
平行弧當具痕。外面暗灰色・
内面灰色。129 は須恵器
坏身。受部径 13・器高 4 cm。
底面にヘラ記号・灰かぶり。
受部下に沈線 1 条。蓋と合
わせ焼きで口縁片が焼き付
く。外面暗灰色・内面灰色。
130 は土師器高台坏小片。
高台が半分以上摩滅。調整
不明。胎土精良で浅黄橙色。
131 は瓦質火舍小片で足
が欠損。内面粗いヨコハケ。
灰色。断面浅黄橙色。9世
紀代。

不整形土壤 SX01 (Fig.19)
E1 グリッドに位置し西
の調査区外に延びる。平面
は凹凸の著しい不整形。3.9
+ a × 2.7 m 深さ 10 cm 程
で浅い。暗褐色混土中砂が
堆積し、自然流路と思われ
る。

出土遺物 (Fig.20) 132
は土師器壺。口径 30 cm。
内面頭部下はケズリ。明黄
褐色。133 は須恵器坏蓋。
口径 16 cm。天井は回転ケ
ズリ。口縁内外は回転ナデ。
内面中央はタテナデ。灰白

色。134は新羅無釉陶器甕。外面格子目タタキ・内面粗い平行当具痕。淡青灰色。9世紀代。

不整形土壙 SX07 (Fig.19) SX01の北に位置し西の調査区外に延びる。平面は凹凸の著しい不整形。 $2.3 + a \times 1.4$ m深さ10cm程の溝状で同じく暗褐色混土中砂が堆積し、自然流路と思われる。

出土遺物 (Fig.20) 135は新羅無釉陶器甕。外面細かな格子目タタキ・内面粗い平行当具痕。136は須恵器高台坏。底径7.4cm。胎土精良で灰色。9世紀前半を示す。

不整形土壙 SX14 (Fig.19) C1グリッドに位置し SX12を切り SD02上層に切られる。平面は凹凸の著しい不整形。 $6.4 \times 2.4 + a$ m深さ40cm程で60~100cm程の小土壙が多数重なる。暗褐色混砂土が堆積する土取り状遺構。

出土遺物 (Fig.20) 137は須恵器坏蓋。端部の返しはやや不明瞭。淡灰色。8世紀後半~末。

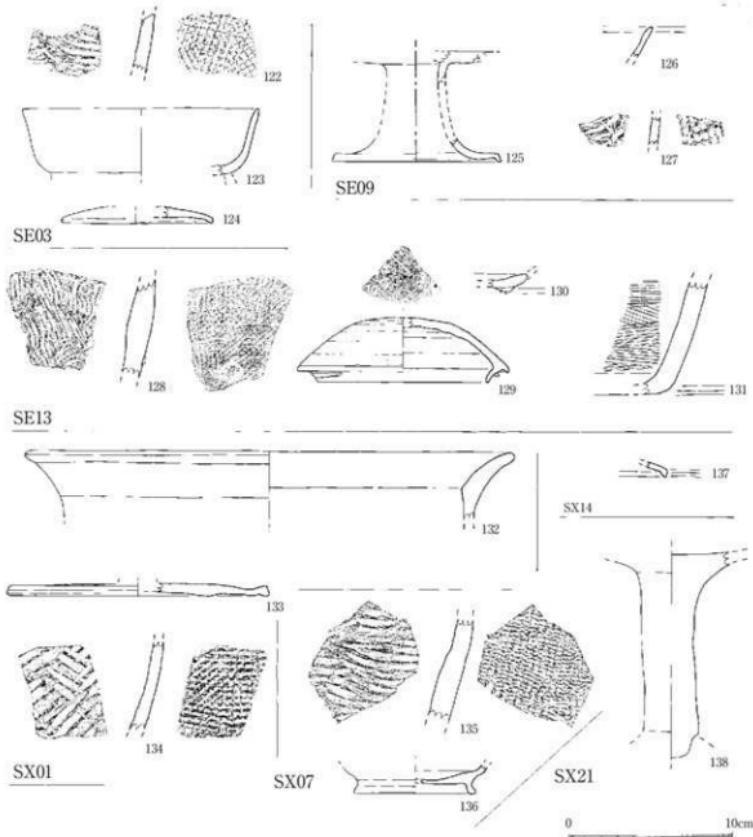


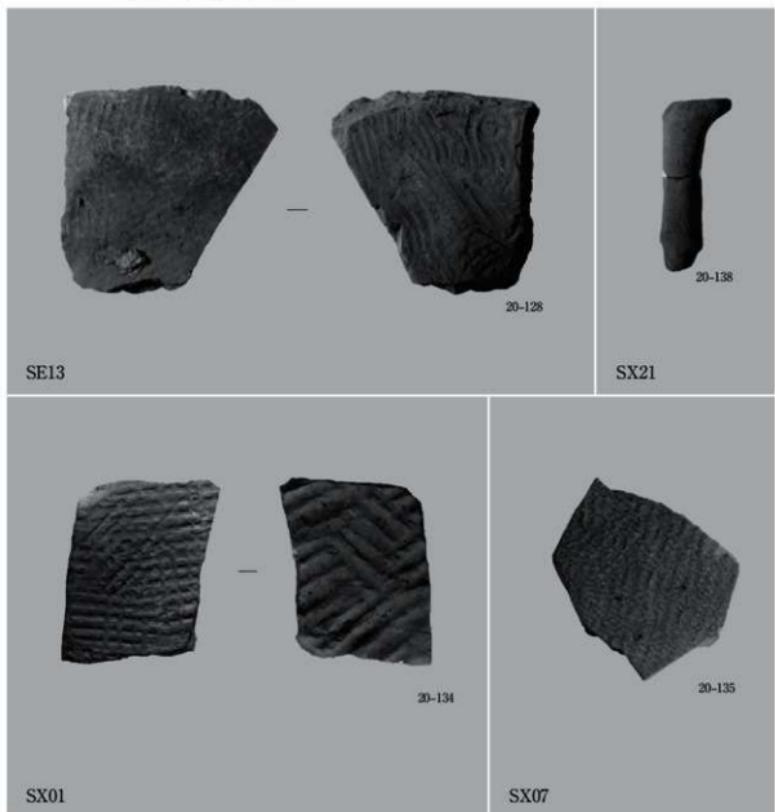
Fig.20 SE03・09・13・SX01・07・14・21 出土遺物実測図 (1/3)



Ph.50 SE13 (西から)

不整形土壌 SX21 (Fig.19) SX14 の北に位置する。平面は $8.6 \times 2.1 + a$ m 深さ 15 cm 程の溝状で北から南に下がる。SX01・07 同様暗褐色混土中砂が堆積し、自然流路と思われる。

出土遺物 (Fig.20) 138 は土師器長脚高坏脚部。現況で 12.5 cm を測り下面は接合痕。橙色を呈す。9 世紀代を示す。



Ph.51 奈良時代出土遺物

5. 混入資料

Fig.21～23は各遺構の混入資料である。139～142は晩期～弥生前期石器。139は黒耀石石核で $2.7 \times 2.4 \times 2.1$ cm。140は黒耀石石錐で $3.1 \times 2 \times 1.1$ cm。141・142は玄武岩扁平打製石斧。141は $7.6 \times 6.4 \times 1.6$ cm 108g。142は $5.8 \times 5.4 + a \times 1.6$ cm。143は土製投弾の半欠品。 $2.5 + a \times 2.3$ cm。144～149は弥生中期土器。144は鋤先口縁壺。口径30cm。145は逆「L」字口縁丹塗り壺。径21.7cm。147～149は壺底部で147は径7cm。148は8.8cm。149は8cm。150～153は弥生後期土器。150・151は壺底部。共に径10cm。152は壺底部。径5.4cm。153は支脚脚部。径10.2cm。159は在地系高環脚部。154～161は弥生終末～古墳初頭。154は在地系壺口縁。外面ナナメハケ。口径40.5cm。155は山陰系二重口縁壺。口径26cm。外面調整不明。内面頸部下ヶズリ。156は瓶底部。径3mm程の焼成前小孔を4孔穿孔。157は布留系壺。口径17.5cm。内面胴上

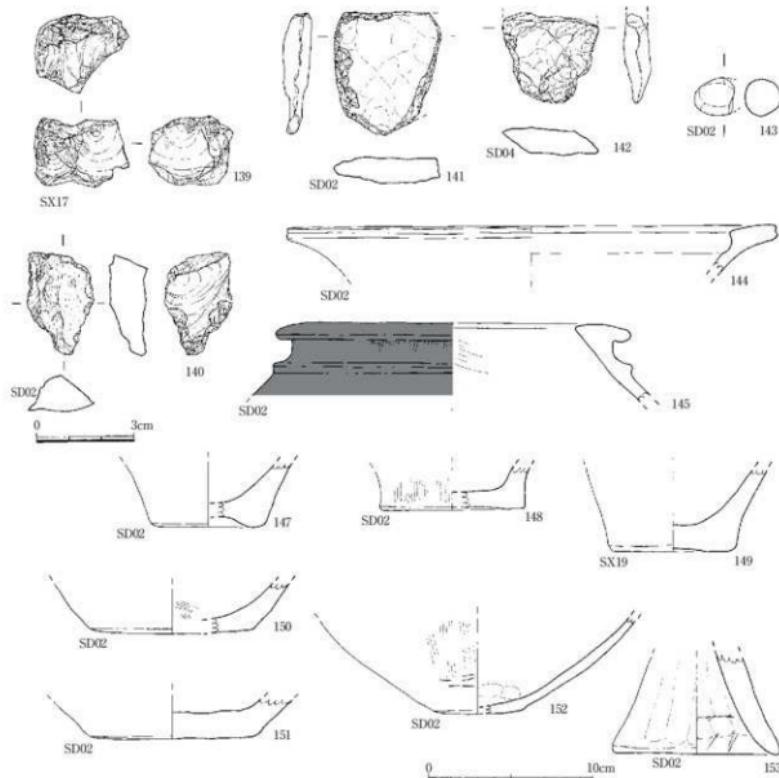


Fig.21 混入遺物実測図.1 (1/3・139.140=2/3)

位下にケズリ。158は在地系壺。口径29cm。低い頸部突帯に刻目。160は山陽系高坏脚部。浅黄橙色。161は山陰系低脚杯の脚部。径8.8cm。内底に径6.5mmの接合压痕。162～166は古墳時代後期。162～165は須恵器。162はⅢ期高坏脚。163は同有蓋高坏脚部。受部径14cm。164はVI期坏蓋。径14cm。165は陶質土器高坏脚部。裾に円孔を4孔対面に穿孔する。166は流出津。3.1×1.7×0.1cm。底面に粘土付着。171は白磁IV類底部転用の瓦玉。径8.2cm。周縁を打ち欠きで整形。

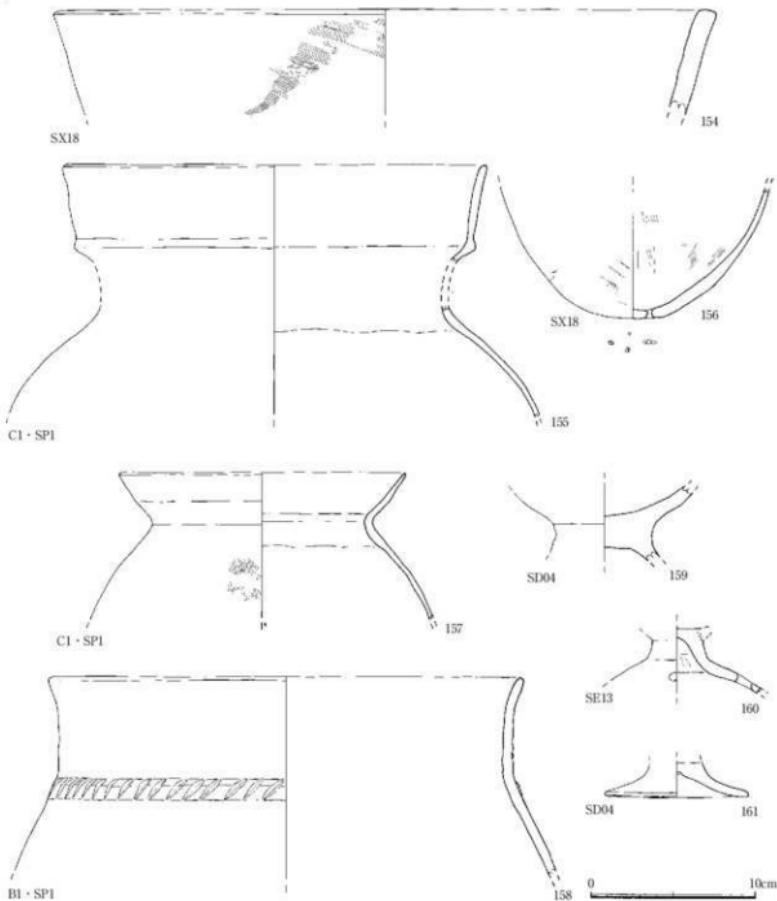


Fig.22 混入遺物実測図2 (1/3)

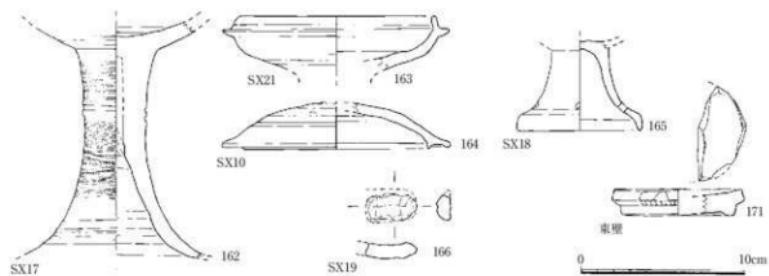


Fig.23 混入遺物実測図.3 (1/3)



Ph.52 混入資料

IV. 小結

調査の結果、本調査区は比恵・那珂遺跡群間鞍部の奥部北側に位置し、南東に緩傾斜する。開析作用により八女粘土上が露出するが、上面に弥生～古墳時代前期の黒灰色粘質土包含層・古墳時代後期～古代の暗灰褐色粘質土包含層が遺存し、それぞれの下面で古墳時代後期～古代・弥生～古墳時代前期の遺構を検出した。

標高は5.4mを測り、検出したおもな遺構は弥生時代終末期の土壙2基・土取り状不整形土壙5基、古墳時代初頭～前期前半期の土壙1基・土取り状不整形土壙1基・溝1条、一部上面で古墳時代後期溝1条・土壙4基・土取り状不整形土壙2基・井戸状遺構1基、古代の井戸3基・不整形土壙4基他柱穴多数を検出した。主に4時期の集落が重複している。コントナ28箱分検出している。

遺物としては数片のチャート剥片や凝灰質砂岩・チャートの破断小円礫を多数検出しており、旧石器の可能性を含む。弥生時代板付I～IIa式期の遺物を後代の遺構混入資料として採集し、遺跡群内

縄文晩期～弥生前期の遺物としては扁平打製石斧・黒耀石石核・石錐の出土があるが、少量で遺構は伴わない。中期も同様であるが、遺物はある程度まとめて検出される。遺構は検出されないが、周辺の9・10・82次調査で井戸、76次調査で堅穴住居が検出されており、本調査区周辺に遺構が存在する可能性は高い。後期後半に至ってまとまった遺物量と器形の知れる大きな破片が終末～古墳前期の不整形土壙内に検出される。報告したように牛と思われる多数の足跡に蹂躪されており、攪拌による可能性を含む古式土師器を供伴するが遺構の存在の可能性は高い。周辺の9・10・61・82次調査で井戸、76次調査で堅穴住居は検出されている。

確実な遺構の存在は終末期からで、無数の小土壙が密集した不整形土壙を5基検出している。掘削後は早い時期に埋め戻されており、良好な八女粘土を探掘した土壙と考えられる。SX10・17・19の底面からは足場とした木板・棒が検出される。

古墳時代初頭～前期前半には調査区を現街区に沿って横断する大溝SD02が掘削される。底面近くに弥生後期後半期の遺物が多く、同期の溝を改削している可能性も考えられる。周辺ではこれに連なる大溝は現段階では検出されていないが、方向が近いものとしては82次調査の古墳後期のSD15・16が並行する。SD02出土の特筆すべき資料としては合わせて鋳造の銅鏡61と68・69・78・79の山陰系土器・74の東海系土器などの外來系土器と共に半島系の炉形土器の低脚部54の出土がある。周辺では76次調査で半島系軟質土器が住居から出土しており、比恵・那珂遺跡群が同期の国内有数の交易拠点である証左をまた増やしている。炉形土器の破片は南西の中村町遺跡第3次調査弥生終末～古墳初頭の住居SC005からも出土している。

今回の調査での主要な時期は古墳時代後期小田富士雄編年IV期で、溝1条・土壙4基・土取り状不整形土壙2基・井戸状遺構1基を検出している。この時期で特筆すべきは黒灰色包含層上面と溝SD04底面に残るおびただしい個踏跡と思われる獸類の足跡と、鉄滓の出土である。周辺調査では9・10次調査で溝・建物が検出されるのみで少ないが、8次調査を中心とする「那津官家」と同時期であり、資材・庸米の搬送・建築等の関連が示唆される。底面の凹凸が著しい溝の例として遺跡内で9・10次調査弥生後期後葉の1号溝、61次調査古墳前期のSD05、81次調査弥生終末～古墳時代SD12がある。

古代は周辺では検出されておらず、同期の遺構の中心は那珂遺跡群に移行して比恵遺跡全体でも数少ない時期である。この状況で井戸3基を検出しており、周辺に集落が分布する可能性は極めて高い。

- 参考文献：「比恵遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 145 集 1986
 「比恵遺跡群26」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 562 集 1998
 「比恵遺跡群32」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 771 集 2003
 「比恵遺跡群33」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 782 集 2004
 「比恵遺跡群37」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 832 集 2004
 「中村町遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 891 集 2006



Fig.24 周辺溝分布図 (1/4,000)

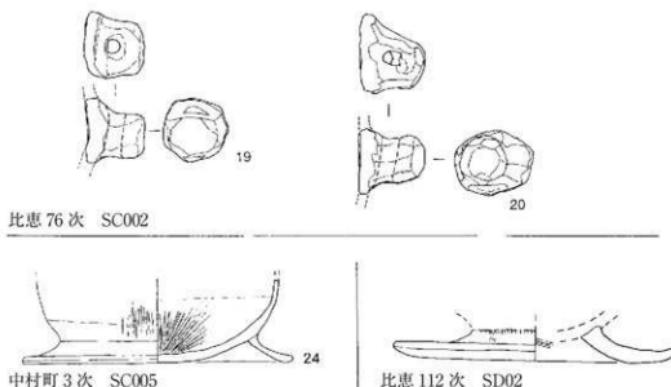


Fig.25 関連半島系土器 (1/3)

Tab. 1 遺構一覧表

土壤番号	グリッド	時期	規 模 幅×横×深さ(m)	平面形	主な出土遺物	写真番号	辨図番号
SK06	E3	弥生終末	135×128×0.25	台形	弥生土器(壺)		7
SK08	E2	古墳後期	152×118×0.43	方形	土器器(高环・壺)	39~40	16
SK15	C2	弥生終末～古墳前期	0.8×0.7×0.95	円形	土器器小片		
SK16	C2	古墳初期	1.4×0.66×0.25	椭円形	土器器(壺)	29	12
SK20		古墳後期 (IV期)	1.54×0.75×0.58		破壊器(壺・壺蓋)、土器器小片		
SK22	E3		1.54×0.75×0.58				
SK23	A2	古墳後期	12.75×0.25	椭円形	破壊器(壺・杯)、土器器(杯)		
SK24	A1	古墳後期 (IV期)	2.0×1.35×0.53	方形	破壊器(壺・壺・蓋・环身)、土器器(壺・壺・石器(砾石))	41	16
井戸番号	グリッド	時期	規 模 幅×横×深さ(m)	平面形	主な出土遺物	写真番号	辨図番号
SE03	E2	8世紀前半～9世紀初頭	2.54×2.08×1.2	方形	新羅無輪陶器(壺・環底器(壺・壺・器台・环身・环蓋)・土器器(壺・高杯・杯蓋))	46~47	19
SE09	D2	8世紀	1.93×1.6×1.25	方形	新羅無輪陶器(壺・環底器(壺・高杯・环・瓶)、土器器(壺・高杯・环・白盤))	48~49	19
SE13	C1	9世紀	1.98×1.54×1.25	方形	新羅無輪陶器(壺・瓦質土器(火炎)・破壊器(壺・高杯・环身)・土器器(壺・高杯・瓶)・新骨(母子貯藏))	50	19
SE25	A2	古墳後期 (III期～IV期)	1.38×1.34×0.92	円形	破壊器(环身・环蓋)・土器器(壺・高杯・环・ミニチュア)・自然遺物(桃・桃干)	41	16
溝番号	グリッド	時期	規 模 幅×横×深さ(m)	平面形	主な出土遺物	写真番号	辨図番号
SD02	A1～E1	古墳初期～奈良	4.4×0.7		須恵器(壺・高杯・环・环身・环蓋・盆・盖・土器器(家・坛・壺・高杯・环・盆・台形器台・瓶・壺・环・ミニチュア)・黑色土器(环)・瓦・土器品(投擲)・土器片(凹窓)・石器(黑曜石・石・砾石・研磨石・縦平打撃石斧)・サルカイト・玄武岩・石臼・焼成繩(田器器)・鞋石・土器(瓶)・銅鏡・铁斧・削口)	21～28	12
SD04	A3～E3	古墳時代後期 (Ⅲ期～Ⅳ期)	1.6×0.85		須恵器(壺・高杯・环身・环・盖・环底器・提瓶・壺・盖・土器器(壺・高杯・环・瓶・盖・脚・ミニチュア)・瓦質土器(壺)・土器片(凹窓)・石器(砾石・縦平打撃石斧)・铁斧・自然遺物(桃・桃干))	32～37	16
その他の番号	グリッド	時期	規 模 幅×横×深さ(m)	平面形	主な出土遺物	写真番号	辨図番号
SK01	E1	9世紀	39+a×2.7×0.1	不整形	新羅無輪陶器(壺)・須恵器(壺・高杯・环身・环蓋)・土器器(壺・高杯・环・瓶)		19
SK05	E3	古墳初頭	39×1.4×0.1	不整形	土器器(壺)		12
SK07	D1	9世紀前半	23.5+a×1.4×0.1	不整形	新羅無輪陶器(壺)・須恵器(壺・高台环・环身)・土器器(壺・高杯)		19
SK10	D2～D3	弥生終末	4.2×3.0×0.55	不整形	須恵器(环蓋)・土器器(壺・盆・高杯)・弥生土器(壺・壺・高杯)	10～12	7
SK11	C2～C3	弥生終末	6.8+a×3.8×0.6	不整形	弥生土器(壺・盆・高杯・环・埋)・铁斧・須恵器・土器器	5～7	5
SK12	D1	弥生終末	3.7×2.8×0.48	不整形	弥生土器(壺・盆・高杯)・石器(砾石)	8	5
SK14	C～D1	8世紀半～末	6.0×2.4+a×0.64	不整形	須恵器(壺・环)・土器器(壺・高杯・环・瓶)		19
SK17	A2～C3	弥生終末	5.1×3.6+a×0.66	不整形	弥生土器(壺・煮・高杯・脚付鉢)・石器(砾石)・黒曜石製石器・木器(櫛耙)	13～15	7
SK18	E2	古墳後期 (Ⅲ期～Ⅳ期)	2.7×2.6×0.28	不整形	須恵器(壺・高杯・环身・环)・土器器(壺・高杯)・黒曜石(研磨石)	42~43	16
SK19	A～B3	弥生終末	3.7×3.8+a×0.65	不整形	弥生土器(壺・煮・高杯・环)・铁斧・土器器	16	7
SK21	A～B1	9世紀	8.65×2.1+a×0.15	不整形	須恵器(壺・高杯)・土器器(壺・瓶・高杯)		19
SK26	E2	古墳後期 (IV期)	0.85×0.6+a×0.30	不整形	須恵器(壺・瓶・高杯)・土器器(壺・瓶・高杯・环)・铁斧	44	16

報告書抄録

ふりがな	ひえ							
書名	比恵55							
副書名	比恵遺跡群第112次調査報告							
卷次	55							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1049							
編著者名	加藤良彦							
発行機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 Tel.092-711-4667							
発行年月日	20090331							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東經 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
比恵遺跡群 第112次	福岡市博多区博多駅前6丁目 85-1・85-2	40132	0127	33° 34' 26"	130° 25' 33"	20071015 / 20071130	354.3	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
比恵遺跡群	集落	弥生 古墳 古代	溝 土壙 井戸 粘土探掘 壙	弥生土器・銅 鏡・古式土師 器・鉄滓・半 島系土器・須 恵器・土師器			弥生時代末～古墳時代初頭の半島系 土器片と近畿・山陰など多くの外来 系土器出土 7世紀前半の牛蹄跡多数と鉄滓出土	

比恵 55

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1049集

2009年（平成21年）3月31日

発行	福岡市教育委員会 〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷	有限会社 西菱 〒814-0165 福岡市早良区次郎丸1-7-1